

長野遺跡群

県町遺跡

(仮称) サーバス県町新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017年3月

長野市教育委員会



A区2次面SB4北壁隔土器出土状况



A区2次面SB4北壁隔出土土器



A区2次面SB4北壁隅土器および床面土器・炭化材検出状況（西から）



A区2次面SB4北壁隅土器および床面土器・炭化材検出状況（北から）

序

埋蔵文化財は、地域の歴史と文化の成り立ちを明らかにするうえで欠くことのできない貴重な財産であります。

近年人々は、社会の変化を受け環境や景観に配慮した生活空間を願い求め、地域の自然、歴史・文化を具体的に示す各種への文化財への関心や期待は確実に高まっています。

ここに長野市の埋蔵文化財第147集として刊行いたします本書には、(仮称)サーバス県町新築工事に先立ち、記録保存を目的とした発掘調査によって得られた成果を、長野遺跡群に属する「県町遺跡」として詳しくまとめられています。発掘調査では、弥生時代中期、奈良・平安時代の集落跡を検出し、また、弥生時代中期の住居跡からは、土器、炭化物、柱跡などが検出されています。この成果が地域の歴史解明、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力をいただいた事業者や地域の皆様、重機等による掘削作業や現場事務所等の機材を現物提供をいただいた関係者、また、発掘作業に携わっていただいた皆様に感謝申し上げます。

平成29年3月

長野市教育委員会
教育長 近藤 守

例 言

- 1 本書は、民間開発事業マンション建設工事に伴い、記録保存を目的として平成27年度（一部平成28年度）に実施した緊急発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査の実施については、長野都市計画株式会社の代表取締役と長野市長との委託受託契約に基づき長野市教育委員会の直轄事業として埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 調査地は、長野市大字南長野字聖徳527番4外に位置する。
- 4 開発事業面積1193.92㎡を保護対象面積とし、そのうち埋蔵文化財の破壊が懸念される範囲の600㎡を発掘調査対象面積とした。実質調査面積は596㎡である。
- 5 発掘調査は、平成27年度と翌28年度にわたり実施した。
(建物部分は、平成28年1月12日から2月19日まで、立体駐車場部分は、平成28年4月25日から5月17日まで)
- 6 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（日本測地系2000）と日本水準原点の標高を基準としている。株式会社写真測図研究所の開発した遺跡調査支援システム「ATS」のうち、光派測距儀を用いた「コーディック・システム」を採用するため同所に委託した。
- 7 A区2次面SB4出土の土器内土壌と柱材についての科学分析を、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。第Ⅳ章自然科学分析として報告している。
- 8 遺跡の略号は「NASP」である。
- 9 調査によって得られた出土遺物および写真・図版等の諸記録は、長野市教育委員会文化財埋蔵文化財センターにて保管している。

凡 例

- 1 遺構図の縮尺は、全体図を1：150、遺構個別図を1：80とした。このほか微細図その他については適宜個別に縮尺を示した。
 - ・個別遺構図の平面図、破線は炭化物の、スクリーントーンは焼土の検出範囲を示す。
- 2 遺構断面図における数値は、標高を示し、図ごとに適宜示している。
- 3 調査区は、検出した区および面でA区1次面、A区2次面、B区1次面、B区2次面のように区分した。本文第3章第2節から、各遺構名を表記する際に区・面を、A-1、A-2、B-2、(B区1次面遺構なし)と略して記載している。
- 4 表1遺構表の遺構の検出率は全体に対しての検出の割合を示している。(完=全体、一部=検出わずか)
- 5 土器は接合作業後、全形および残存部位に対しておおよそ1/4以上あるものを選別したが、特筆されるものについてはこれにかぎらない。
表2土器観察表での「残存部」の表記については、これに順じている。
- 6 遺物図版については、
 - ・遺物実測図の縮尺は、土器が1：4、硯・石器・土製品を1：3にて示した。
 - ・土器実測図は、断面白ぬきが土師器、黒ぬりが須恵器を示す。
黒色アミかけは黒色処理を、赤色は赤色塗彩を示す。
- 7 遺物写真図版の番号は、遺物実測図の番号と対応する。

目次

巻頭写真

序文

例言・凡例

目次

I 調査経過	1
1 調査に至る経過	1
2 試掘調査の概要	2
3 調査の経過	4
4 調査体制	5
II 周辺の遺跡と環境	6
1 遺跡の立地	6
2 県町遺跡周辺の遺跡	8

III 調査の成果	9
1 調査の概要	9
2 遺構	17
3 遺物	32
1 土器、2 硯、3 石器、4 土製品	
IV 自然科学分析	45
V まとめ	62
遺物写真	64

挿図目次

図1 調査区位置図	1
図2 試掘トレンチ位置図	2
図3 試掘トレンチ土層柱状図	2
図4 調査区位置図	3
図5 調査地周辺地形・遺跡分布図	7
図6 周辺既住調査地点位置図	8
図7 A区1次面全体図	10
図8 A区2次面全体図	11
図9 B区2次面全体図	12
図10 SD1・2断面図	12
図11 A-1SB2実測図	17
図12 A-1SB4・9実測図	18
図13 A-1SB5・6実測図	19
図14 A-2SB1実測図	20
図15 A-2SB2・3実測図	21
図16 A-2SB5実測図	21
図17 A-2SB5カマド周辺土器・ 焼土出土状況実測図	22
図18 A-2SB6実測図	23
図19 A-2SB7実測図	23

図20 B-2SB1・2実測図	25
図21 A-2SK5実測図	25
図22 A-2SB4実測図	26
図23 A-2SB4床面土器・炭化材、 柱痕検出状況図	27
図24 A-2SB8実測図	30
図25 A-2SK4土器・石出土状況図	30
図26 A-2SK4実測図	30
図27 出土土器実測図1	33
図28 出土土器実測図2	34
図29 出土土器実測図3	35
図30 出土土器実測図4	37
図31 出土土器実測図5	38
図32 出土土器実測図6	39
図33 出土土器実測図7	40
図34 硯実測図	44
図35 石器実測図	44
図36 土製品実測	44
図37 住居床面標高・位置図	63

表目次

表1 遺構表	15
表2 土器観察表	41

表3 硯・石器・土製品観察表	44
----------------	----

写真目次

<巻頭図版>

A区2次面SB4北壁隅土器出土状況	2
A区2次面SB4北壁隅出土土器	2
A区2次面SB4北壁隅土器および床面土器・炭化物検出状況(西から)	2
A区2次面SB4北壁隅土器および床面土器・炭化物検出状況(北から)	2
<本文>	
試掘トレンチA	2
試掘トレンチB	2
調査地周辺航空写真(平成27年撮影)	3
作業風景(A区1次面)	4
作業風景(A区2次面)	4
作業風景(A区2次面)	4
表土除去(B区2次面)	4
A区2次面SD1・2(西から)	12
A区1次面全景(西から)	13
A区2次面全景(北西から)	13
B区2次面全景(西から)	14
A区1次面全景(北東から)	14
A区2次面全景(北東から)	14
B区1次面全景(南東から)	14
B区2次面全景(西から)	14
A-1 SB2全景(東から)	17
A-1 SB3カマド(南から)	18
A-1 SB4・9全景(北西から)	18
A-1 SB9(北西から)	19
A-1 壁面炭面確認(西から)	19
A-1 SB5・6全景(北から)	19
A-1 SB6カマド、SB5床面土器(北から)	19
A-2 SB1全景(東から)	20
A-2 SB1カマド(北東から)	20
A-2 SB2・3全景(南から)	20
A-2 SB3カマド(南から)	20
A-2 SB5全景(北西から)	22
A-2 SB5床面焼土・土器(南西から)	22
A-2 SB5カマド(西から)	22
A-2 SB5カマド焼上下(西から)	22

A-2 SB6全景(南から)	23
A-2 SB7全景(南東から)	24
A-2 SB7カマド検出(南東から)	24
A-2 SB7カマド(南東から)	24
B-2 SB1全景(北から)	24
B-2 SB2全景(南から)	24
A-2 SK5全景(南から)	25
柱1検出	28
柱2検出	28
柱4検出	28
柱7検出	28
柱1断面	28
柱2断面	28
柱3断面	28
柱4断面	28
柱5断面	28
柱6断面	28
柱7断面	28
A-2 SB4隅土器出土状況(南東から)	29
A-2 SB4隅土器出土状況(北西から)	29
A-2 SB4床面土器・炭化物出土状況(北東から)	29
A-2 SB4床面土器・炭化物出土状況(南東から)	29
A-2 SB4床面出土土器	29
A-2 SB4床面土器、柱痕検出	29
A-2 SB4全景(南から)	29
A-2 SB4全景(柱痕検出)(南から)	29
A-2 SK4東側土器出土状況(南から)	30
A-2 SK4全景、西側土器出土状況(南から)	30
A-1 SB1(南から)	31
A-1 SB5・6・7・8(北から)	31
A-1 調査区西側住居(南東から)	31
A-2 SB1、SK1、SD1(東から)	31
A-2 SB8、SK2・3(東から)	31
B-2 SD1(南東から)	31
B-2 SD1ベルト断面(南から)	31
B-2 SD2(南から)	31

I 調査経過

1 調査に至る経過

調査地は、長野県庁に程近い長野市の中心市街地に位置する。ここにマンション建設の計画が浮上したのは平成26年9月である。当該地は長野遺跡群の範囲内であることから開発事業計画の担当者との間で協議を行い、文化財保護法第93条の規定に基づく届出と試掘による確認調査を事前に行う必要があることを説明した。

平成27年4月15日付で株式会社穴吹工務店信越支店から「試掘調査依頼書」が提出され、同月20日付で文化財保護法第93条の規定に基づく届出が提出された。これに対し試掘調査が必要となることから「発掘調査」の指示をし、5月18日に対象地での試掘調査を実施した。その結果、現地表面下約80cmから2層にわたる遺物包含層を確認し、記録保存を目的とした発掘調査が必要となった。その後、この結果を踏まえた協議を行い、マンション建物本体部分と機械式駐車場の建設予定地については埋蔵文化財への影響が避けられないこと、その他の部分については現状保存をはかることで協議が成立した。これにより平成27年12月14日付で「埋蔵文化財に関する協議書」を、開発事業者である長野都市計画株式会社代表取締役と長野市教育委員会教育長との間で締結し、同日付で平成27年度分の委託契約についても締結した。

発掘調査は、起因工事との調整を行いながら平成28年1月12日から2月19日まで建物部分（A区）を行い、当初平成27年度としていた駐車場部分（B区）については、工事の進捗との調整により平成28年4月25日から行い5月17日に終了した。整理作業は平成28年度に行い、平成29年3月に本報告書を刊行した。

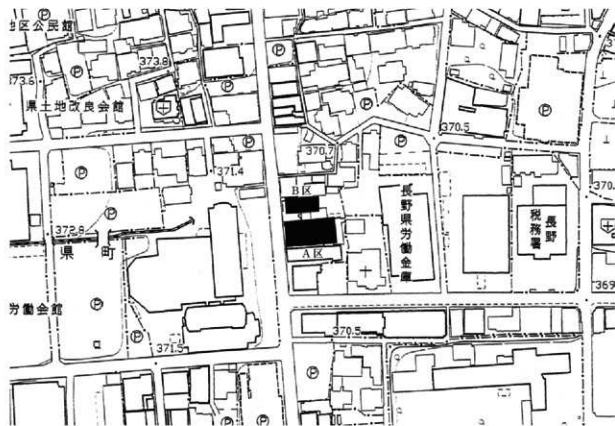


図1 調査区位置図（1：2,000）

2 試掘調査の概要

試掘調査は、工事予定地内に埋蔵文化財が存在する可能性が高い場所であることから、事業予定地内における埋蔵文化財の包含状況の確認を行なうことを目的として、工事着工前の平成27年5月18日に行なった。

・調査方法と調査結果

予定地内に埋蔵文化財包蔵の可能性が考えられる任意の地点に試掘坑を2ヶ所(図2トレンチA、トレンチB)を設定、重機(バックホー)にて掘削(長さ3m×幅1m範囲)をし、坑内壁面の土層観察を行なった(図3)。

トレンチA: 現地表面下73cmまで既存建物解体等の盛土があり、83cmに遺物・炭化物を含む暗灰褐色土層(第5層)と130cm以下にも遺物・炭化物含む暗褐色土層(第7層)および褐色土層(第8層)を確認した。

トレンチB: 現地表面下45cmまでが盛土、55cm下に遺物・炭化物を含む第5層から第8層までを確認し、第6層からは焼土を検出した。なお須恵器杯(図28-52)はこの位置からの出土である。

以上の結果から、開発予定地については埋蔵文化財が良好な状態で包蔵されていることを確認した。

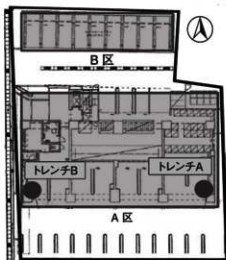


図2 試掘調査トレンチ位置図

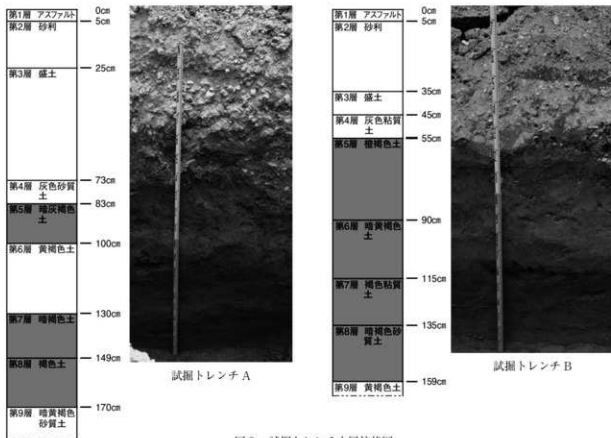


図3 試掘トレンチ土層柱状図



調査地周辺航空写真（平成27年撮影）



图4 調査地位置图（1：10,000）

3 調査の経過

<平成27年度 A区(建物部分)>

平成28年

- 1月12日(火) 1次面重機による表土掘削開始。
- 13日(水) 重機表土掘削。東側から検出作業。
- 14日(木) 検出とあわせて、遺構掘り下げ。
- 19日(火) 午前雪かき、遺構検出作業。
- 21日(木) 午前～雪かき。午後一部シートを上げ検出作業。全体にカクランが入る。
- 22日(金) 住居址を中心に個別写真撮影。
- 26日(火) 1次面測量。
- 27日(水) 図面結線、全景写真撮影。1次面終了。
- 28日(木)～工事作業、発掘に関わる作業なし。

2月2日(火) 2次面重機掘削開始。

- 3日(水) 重機掘削(矢板設置作業と平行)。検出作業(東側から)。
- 5日(金) 遺構検出・掘り下げ。奈良・平安と弥生中期の遺構を確認。
- 9日(火) SK4土器出土図作成。遺構掘り下げ。
- 10日(水) 午前雪かき。西側のシートを上げ作業。
- 12日(金) SB4土器・炭化物を検出し図面作成・出土状況写真撮影。
- 17日(水) SB5など図版作成、順次個別写真撮影。
- 18日(木) 午前：全体清掃・調査区全景撮影。
午後：測量。
- 19日(金) 測量図結線、道具の搬出。午後SB4柱痕を検出、平面・半截後断面の写真撮影柱材の取り上げ。A区の現場作業を終了。

<平成28年度 B区(立体駐車場部分)>

- 4月25日(月) 重機による表土除去作業。全体にカクランが広がることからトレンチで確認。
- 26日(火) 1次面、遺構が残らない事を確認、写真。
- 27日(水) 2次面重機による掘削。検出作業開始。
- 5月6日(金) 遺構の掘り下げ作業。(SB1～3)
- 9日(月) 溝(西・北側)掘り下げ。
- 16日(月) 午前：調査区全景写真。午後：測量。
- 17日(火) 測量図結線。現場での作業を終了。



作業風景 (A区1次面)



作業風景 (A区2次面)



作業風景 (A区2次面)



表土除去 (B区2次面)

4 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として、文化財課埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下の通りである。

なお、発掘調査に伴い必要となった掘削用重機や、作業員休憩所等の機材に関しては、開発事業者より現物提供を受けた。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	近藤 守				
総括責任者	文化財課	課長	青木 和明				
調査責任者	埋蔵文化財センター	所長	小山 敏夫 (H27)				
		所長	森山 正美 (H28)				
		課長補佐	飯島 哲也 (H28調査担当者)				
	庶務担当	係長	竹下今朝光				
		事務職員	大竹 千春 (H27)				
			宮崎千鶴子 (H28)				
	調査担当	係長	飯島 哲也 (H27調査担当者)				
			風間 栄一				
		主事	小林 和子				
		研究員	柳生 俊樹 (H27) 高田亜紀子 (H27)				
			田中 晩穂 遠藤恵実子 (主任調査員)				
			日下 恵一 篠井ちひろ 清水 竜太				
			鈴木 時夫 (H28) 高津 希望 (H28調査員)				
発掘作業員	植木 義則 上原 律江	江守久仁子	大谷 盛孝	大日方 東	岡沢 貴子		
	金井 節 小林紀代美	地子 順子	杉本 千代	鈴木 友江	田原 次郎		
	月岡 純一 原山 健一	村田 岳仁	山口 勝己	山崎 孝之	山本 賢治		
整理調査員	青木 善子 烏羽 徳子	武藤 信子					
整理作業員	清水さゆり 関崎 文子	西尾 千枝	待井かおる	三好 明子			
自然科学分析業務委託	パリオ・サーヴェイ株式会社						
測量業務委託	株式会社 写真測図研究所						
重機等現物提供	株式会社 穴吹工務店信越支店						

II 周辺の遺跡と環境

1 遺跡の立地

県町遺跡が位置する長野遺跡群は、湯福川扇状地と裾花川扇状地による複合地形上、裾花川扇状地を望む河岸段丘上に広がる。裾花川によって形成された扇状地扇頂部上の河岸段丘上であり、湯福神社を頂点に平榮を第一段丘、その下の第二段丘に新諏訪、第三段丘は長野商業高校周辺、第四段丘は県議会館の辺りであり、県町遺跡はこの第四段丘上に位置する。

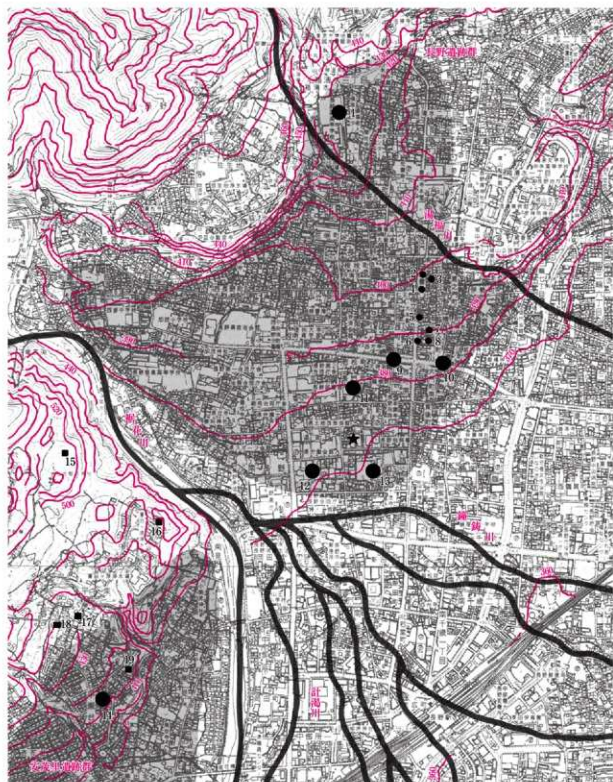
裾花川扇状地は旭山の里島付近を扇頂に東から南の方向に向かっており、市街地を流れる北八幡川や計湯川の水路の方向が裾花川扇状地の傾斜方向を示している。一方、湯福川扇状地は湯福神社を扇頂とする湯福川の急傾斜扇状地であり、現在の裾花川は里島付近から南に流れて犀川に合流するが、盆地形成期は里島付近から東に向かって流下しており、湯福川などの堆積物に押しだされて次第に南へ流れが変わっていったことが考えられる。これらの作用により一帯は地盤は砂礫の堆積物の水はけの良い沖積土壌であること、また位置は南下がりの緩斜面であることから日当たりが良く古くから居住域として利用されていたことが想定される。

長野遺跡群内で遺跡が確認されているのは、湯福川の右岸と裾花川の間で標高370.000mから400.000m、南側は鎌鉾川までの範囲に縄文時代からの集落が展開している。湯福川左岸には、弥生時代後期箱清水式土器の標識遺跡である箱清水遺跡（1）が位置する。大塚山から東南にのびる尾根の丘陵上に位置する遺跡で、弥生時代のはか縄文時代や奈良時代以降の遺物も確認されている。このほかに現在のところ遺跡が確認されているのは、箱清水遺跡の周辺420.000～430.000mの高い位置にある遺跡と、その下湯福川を挟んで段丘を下がった位置から縄文時代以降の集落が展開している。

長野遺跡群の南西、裾花川右岸の扇状地には安茂里遺跡群が分布する。杏花台・平榮などの団地造成に伴い調査が行われた平榮平遺跡（14）は、縄文時代後期の住居跡、弥生時代中期・後期の住居跡と後期の方形周溝墓、古墳時代では前期の方形周溝墓と後期の土壇墓、平安時代では住居跡のほか土壇墓20基が確認されている。またこの周辺には古墳が多く造られており、朝日山平榮古墳群（15～19）は後期を中心とした古墳群であり、古墳の主体部である横穴式石室は、玄室や羨道が良好な状態で残っているものもある。

長野遺跡群の名称は、明治22年の町制施行により市内現行の「大字長野」によるが、これは「長野・南長野・西長野」が合併した際の名称である。裾花扇状地上にあるこの遺跡群の設定には、旧長野町周辺は早くから市街地化が急激に行われてきたことから正式な発掘調査例が少ない状況であることから、この地域の裾花川河岸段丘・湯福川扇状地の一帯に展開することが想定される遺跡を包括し周知することを目的としている。また、善光寺の門前であることから古代の遺構とともに中・近世の善光寺門前遺構（2～8）が存在しており、これらの保存も重要となる地域である。

本遺跡の周辺にて行われた調査（9～13・図6）では、縄文時代から平安時代にかけての遺構・遺物が確認されている。特に県町遺跡（長野国際会館地点、後町小学校地点）では、近い位置にあり同じ時期の遺構が確認されていることから、一連の遺跡の範囲であることが考えられる。古代の出土遺物からは、官衙などの一般的な集落以外としての性格がうかがわれる場所でもあり、長野遺跡群の中でも南側の鎌鉾川に近い位置において周知の縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代に加えて今回、弥生時代の集落も確認された。長期にわたり、集落をはじめとしたさまざまな性格の遺構が展開する場所である。



- 1: 箱清水遺跡 2: 元善町遺跡 3: 元善町遺跡 4: 元善町遺跡 5: 元善町遺跡 6: 善光寺門前町跡
 7: 善光寺門前町跡 8: 善光寺門前町跡 9: 西町遺跡 10: 東町遺跡 11: 旭町遺跡 12: 泉町遺跡
 13: 泉町遺跡 14: 平榮平遺跡 15: 大黒山古墳 16: 北原古墳群 17: 中塚古墳 (中瀬古墳) 18: きょう塚古墳
 19: 遠藤塚古墳 星印: 本調査地 (等高線: 大正15年測量、昭和27年修正図を一部改変)

図5 調査地周辺地形・遺跡分布図 (1: 15,000)

2 県町遺跡周辺の遺跡

- 1 県町遺跡（長野国際会館地点）（破線＝推定調査範囲）：古墳時代中期から後期、奈良時代、平安時代の住居跡、奈良時代の堀立柱建物跡、平安時代の火葬墓と11世紀代に比定される溝が確認されている。堀立柱建物跡からは踏脚礎が出土しており、このほかにも金銅製飾金具があることなど、地方官衙としての性格がうかがわれる遺跡である。
- 2 旭町遺跡（市立長野図書館地点）（破線＝推定調査範囲）：縄文時代中期の住居跡と中に未使用の打製石斧が埋納された縄文時代の埋甕、古墳時代以降の住居が確認される。特に縄文時代ではタカラガイ形土製品や東北系・関東系の土器が出土しており、この時期の広域にわたる交流を示している。
- 3 西町遺跡（国道406号（若松町）道路改良）：縄文時代中期から平安時代の竪穴住居、奈良時代の堀立柱建物と中・近世の建物跡が確認されている。弥生・古墳時代の遺構は湯福川の氾濫堆積土に埋没しており、竪穴住居跡などが良好な状態で検出されている。堆積土上の中世では大溝や土坑が検出されているが居住施設はなく、近世でも近世以降の建物などの破壊を受けていたことから、遺構の残存は少ない。
- 4 東町遺跡（都市計画道県庁大門町線）：西町遺跡と同様に、弥生時代中期・古墳時代中期～後期の住居跡が氾濫堆積土下層で良好な状態で検出された。また上層では中世・近世の土坑などが確認されている。
- 5 県町遺跡（後町小学校地点）：弥生時代中期・後期、奈良・平安時代の住居跡。弥生時代中期の住居は床面に土器と炭化材が残り、焼失住居の可能性が考えられる。古代では住居から後甕が出土しており、このほかにも役所などとの関係がうかがわれる遺物が確認されている。

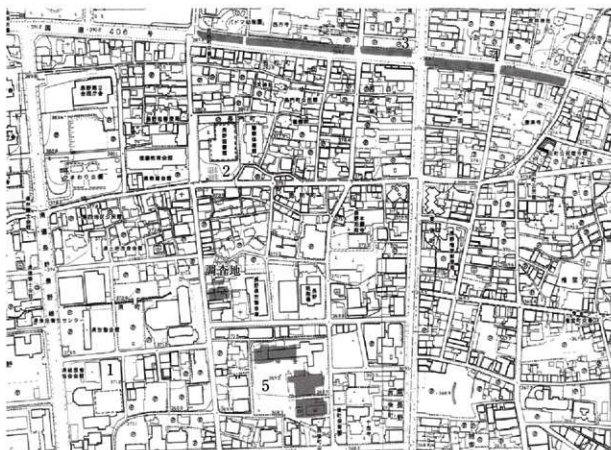


図6 周辺既往調査地点位置図（1：5,000）

Ⅲ 調査の成果

1 調査の概要

A区

調査は、試掘調査で調査前現地表面より約80cmと約130cm下の2面を確認したことから2面を対象として行った。調査面積は1次面が480㎡、2次面は調査前に調査区壁面に矢板の設置作業による掘削を行ったため460㎡となった。検出面は調査区東側から西側に向かって高くなっており、北西方向を高位とした傾斜面となっている。

検出した遺構・遺物は、弥生時代中期、奈良・平安時代である。遺構の確認はなかったが、2次面の検出時から弥生時代後期の土器片も出土している。

1次面：検出面は東側で現地表面から70cm、西側では35cm下で西側の方がおよそ40cmほど高い。1次面の包含層は堆積が薄いとみられていたが、包含層中からは土師器・須恵器が多く出土した。遺構は奈良・平安時代の住居9軒を検出したが、調査区内では西側に寄って位置しており、全体から見ると疎らで、北東側はほぼ見られない状態であった。この理由として、従前建物などによる攪乱が個別の範囲を把握できない程に広がっていたことがあり、影響が少ない箇所での包含層および検出面での土器の出土状況から、本来は全体に遺構があった可能性が考えられる。

住居で全体を検出できたものではなく、カマドを検出したのは4軒、この内1軒はカマド部のみの検出であった。調査区南端の住居(SB4・9)は特に掘り込みが深く、2軒重複した遺構として掘り下げていったが、下にある住居(SB9)の床面がトレンチで確認した炭化物が広がる面よりも下に位置していたことから、間にもう1軒重複していた可能性がある。またSB4覆土中からは、円面硯(脚部破片)と双耳環が出土しており、周辺の遺跡と同様に官衙などの性格を持った場所であることがうかがわれる。

2次面：検出面は1次面検出面から全体的に50cmほど下げて検出を行なった。攪乱は一部残るが、影響の範囲は小さくなっていることから1次面よりも良好な検出状況であった。検出面は1次面と同じく西側が高くなる。遺構は住居8軒、土坑5基、溝1条。住居は奈良・平安時代を主とし弥生時代中期が1軒である。遺構は調査区全体に位置している。

奈良・平安時代の住居は7軒検出した。このうち5軒でカマドを検出したが1次面と同様カマドの向きは一方方向ではなくそれぞれ異なった方向を向く。カマド内には焼土や炭化物が残るものが多く、袖部の構架材や支脚も残されているものがあり、1次面と比べると住居廃棄の際のカマドの破壊行為が少ない。

弥生時代中期は、住居が調査区東側と西端に2軒と土坑1基が隣接した位置にある。住居(SB4)は隅丸長方形で主軸を北西にとる。南側の検出は遺構の立ち上がりがいない状態であるが、検出した床面の範囲と柱の位置から規模はおおよそ6.4×4.8mである。住居の西側では土器を10個体(壺9、甕1)検出した。床面は北側を中心に炭化材と土器が広がり、炭化材の下からは柱痕を計7ヶ所検出した。柱痕は炭化材が残っているものもあり、良好な状態の検出であった。同じく弥生中期の土坑は不整形の掘り込みに土器と石が入れ込まれていた。

1次面は奈良・平安時代、2次面では弥生時代中期と奈良・平安時代の遺構を検出した。特に2次面では、土器片が出土したことから弥生後期も存在する可能性があるが、途中長期間断絶する時期がある。この理由としては、弥生中期の住居の土器内土の堆積物から河川の影響の可能性が示されたように、周辺では集落の展開に影響する自然環境の変化があったことがうかがわれる。

III 調査の成果

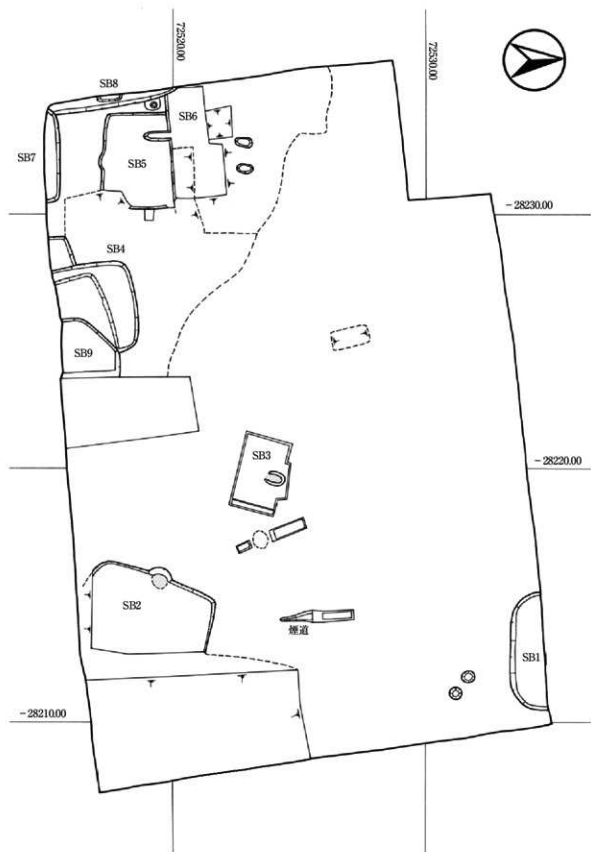


図7 A区1次面全体図(1:150)

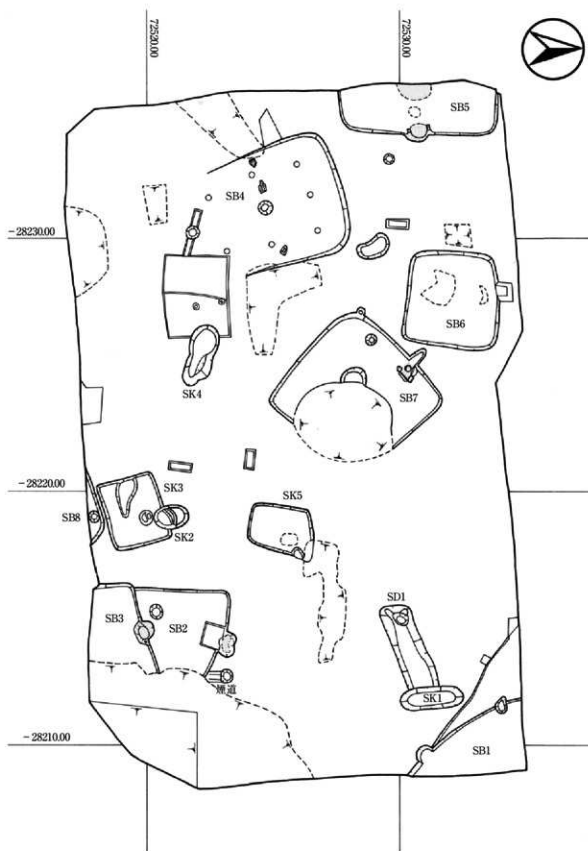


图8 A区2次面全体图(1:150)

B区1・2次面

1次面では、調査範囲の全体に従前建物の基礎やその解体などの擾乱の影響を受けていることから、遺構の検出ができなかった。重機掘削ではA区で1次面を確認した高さまで掘り下げ、部分的にトレンチを設定し擾乱の影響範囲を把握することとした。この結果、調査区東端で地山面を確認したが、深さが2次面検出面に相当することから、1次面の包含層及び遺構面は残存していないことを確認した。このため、確認のトレンチを入れた時点での写真を撮るのみとし、2次面の検出作業を行った。

2次面では遺構面は確認できたが、検出面自体も上部を削られているものと考えられる。遺構は住居3軒、溝2条である。住居は上部が削られている可能性もあることから、全体に検出面からの掘りこみは深くない。住居は調査区の東側に集中しており、カマドが確認できたSB1・2は北方向にカマドが位置し一部重複している。調査区西側では、溝状遺構(SD1・2)を検出した。いずれも狭い範囲であるが、SD1は南北方向、SD2は東西方向となる。SD1は東から西に向かってなだらかに深くなって行く。北西の端で底面を確認したが、掘り込みは地山面を抜いて川原石を含む赤褐色の砂礫層であった。この底面は、A区で工事の矢板設置作業時に調査区の周囲を深掘した際に遺構面の下の層として確認した層である。深さは地表面から約190cm、検出面からは60～70cmである。SD2は舟底状に近いゆるい掘り込みで、底面は砂層の近くから水が湧きはじめた。SD1・2共覆土中からの遺物はほとんどみられなかった。

同じく溝跡としているが、遺構の性格が違うことが考えられ、SD1は急な傾斜と平坦な底面の溝状遺構、SD2は掘り込みであることが想定される。時期も不明であるが、住居と重複しない位置にあることから、特にSD1はA区も含め、住居と同じ時期に存在していたものと考えられる。

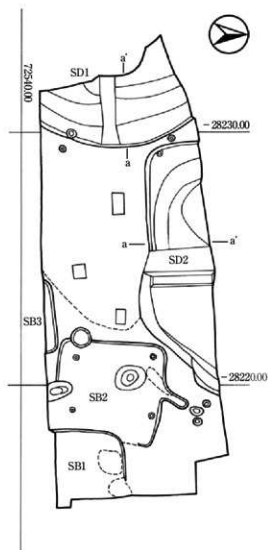


図9 B区2次面全体図(1:150)

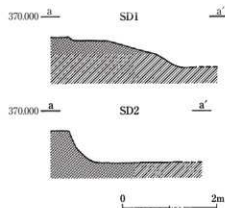


図10 SD1・2断面図(1:80)



B区2次面SD1・2(西から)



A区1次面全景（西から）



A区2次面全景（北西から）

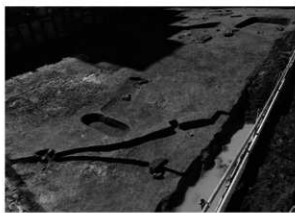
Ⅲ 調査の成果



B区2次面全景（西から）



A区1次面全景（北東から）



A区2次面全景（北東から）



B区1次面全景（南東から）



B区2次面全景（西から）

表1 遺構表

区	面	遺 構					土 器		その他 遺 物	
		遺構名	時 期	平面形 (規模 m)	検出率	施設・主軸・重複 ほか	個別 図版	出土量 (g)		実測数 図 版
A	1	SB1 1号住居	奈良時代	(長)方形 —×4.6	1/5			2,585	2	
									図27-27・28	
A	1	SB2 2号住居	平安時代	方形 —×5.2	1/2	カマド壁面中央(北西)	図-11	7,375	9	
									図27-1~9	
A	1	SB3 3号住居	奈良時代	(カマドのみ) —	一部	カマド壁面中央(北側) カマド・床面焼土、土器		1,160	2	
									図27-10・11	
A	1	SB4 4号住居	奈良時代	長方形 —×3.6	2/3	SB9に重複	図-12	8,475	15	片面硯
									図27-12~26	図34
A	1	SB5 5号住居	平安時代	方形 —	1/2	カマド壁面中央(南) SB6にきられる	図-13	2,595	5	
									図28-29~33	
A	1	SB6 6号住居	奈良時代	方形 —	1/4	カマド壁面中央(南) SB5をきる	図-13	740	1	土鏃
									図28-35	図36-1
A	1	SB7 7号住居	平安時代	方形 —×3.7	一部	SB8と一部重複		440		
A	1	SB8 8号住居	平安時代	方形 —	一部	遺構内土坑1		525	1	
									図28-34	
A	1	SB9 9号住居	奈良時代	方形? —	一部	SB4の下(2次面に相当) (SB4との間に1軒重複?)	図-12	6,995	5	
									図28-36~40	
A	1	ピット1	奈良・平安	円形	完			80		
A	1	ピット2	奈良・平安	円形	完			30		
A	1	検出面	奈良・平安					11,165	2	
									図28-41・42	
A	2	SB1 1号住居	奈良時代	方形 —	1/4	カマド(南西)	図-14	1,910	1	
									図28-43	
A	2	SB2 2号住居	奈良時代	長方形 —	1/2	カマド壁面中央(北東) 床面炭化物	図-15	1,140	3	
									図28-44~46	
A	2	SB3 3号住居	平安時代	方形 —	1/3	カマド中央(北)SB2をきる 床面炭化物・土器	図-15	2,760	3	
									図28-49~51	
A	2	SB4 4号住居	弥生時代 中期	隅丸長方形 (6.4)×4.8	3/4	住居隅土器10個 炉(中央)(炭化物下) 床面炭化物・土器、柱痕7	図-22、 23	28,435	23	片刃石斧 図35
									図30・31・ 32-93~104	
A	2	SB5 5号住居	奈良~ 平安時代	隅丸方形 —×6.2	1/4	カマド壁面(東向) カマド内・前面に焼土・土器	図-16、 17	6,525	15	
									図29-53~67	
A	2	SB6 6号住居	奈良時代	隅丸方形 3.7×3.8	完	床面、炭化物	図-18	4,260	1	
									図29-70	
A	2	SB7 7号住居	奈良時代	隅丸方形 5.2×5.3	3/4	カマド(北西)右寄り 支脚・礫石・天井石 (遺構下弥生遺構重複)	図-19	3,830	5	
									図29-68・69 図33-122~124	
A	2	SB8 8号住居	弥生時代 中期	隅丸方形 —	一部		図-24	1,105	2	土製品 図36-2
									図33-120・121	

Ⅲ 調査の成果

区	面	遺 構						土 器		その他 遺 物
		遺構名	時 期	平面形 (規模 m)	検出率	施設・主軸・重複 ほか	個別 図版	出土量 (g)	実測数 図 版	
A	2	SK 1 1号土坑	奈良・平安 2.5×0.9	楕円形	完	SD 1に重複		555		
A	2	SK 2 2号土坑	奈良時代 1.3×0.9	楕円形	完	SK 3をきる		180	1 図29-71	
A	2	SK 3 3号土坑	奈良・平安	隅丸方形 2.7×2.3	完	遺構内に掘り込み		725		
A	2	SK 4 4号土坑	弥生時代 中期	不整楕円 2.8×1.1	完	土器・石、覆土～底面	図-25- 26	5,850	15 図32-105～109 -33-110～119	
A	2	SK 5 5号土坑	奈良時代	隅丸長方形 2.5×1.8	完	焼土面、床面土器	図-21	2,945	2 図28-47-48	
A	2	SD 1 1号溝	(弥生中期)	幅:1.1～1.2	一部?	断面船底状 SK 1と重複		2,130	1 図33-126	
A	2	焼土面	弥生?			SB 4南側		1,350		
A	2	検出面	弥生中期 奈良・平安			弥生後期土器片		7,390	4 図29-72～75	
		グリッド				SB 4・SK 4周辺掘り下げ		380	1 図33-125	
A		試掘						470	1 図28-52	
B	1	検出面				ほぼ全体に攪乱		770		
B	2	SB 1 1号住居	奈良時代	方形 —	1/4	カマド(北)、床面炭化物面 ・土器	図-20	3,305	4 図29-76～79	
B	2	SB 2 2号住居	奈良時代	隅丸方形 4.3×4.0	完	カマド(北) 煙道、前面に炭化物	図-20	800		
B	2	SB 3 3号住居	奈良時代	方形 2.8×—	一部			420	1 図29-80	
B	2	ビット 1	奈良・平安					20		
B	2	SD 1 1号溝	弥生中期 奈良・平安		一部	断面逆台形 南北方向(西東に曲がる)	図-10 (断面)	920		
B	2	SD 2 2号溝	奈良・平安		一部	方形の掘り込み	図-10 (断面)	2,375	1 図29-81	
B	2	検出面						1,230		

総 量 : 123,945g

2 遺 構

調査で検出した主な遺構は、住居がA区1次面で9軒、2次面8軒、B区2次面3軒の計20軒。土坑がA区2次面で5基、溝はA区2次面で1条、B区2次面で2条である。

検出面は2面とも前建物などによるカクランが多く入っていたことや、調査区外となる部分が多かったために全体を検出できた遺構の数は少ない。

本章では、遺構の検出状況が良好であったものや特筆されるものを選別して個別・詳細図を掲載した。これ以外の遺構については、調査区全体図(図5～7)にて位置を示すのみとした。なお、本章では調査区および次面表記を次のように簡略して示した。

A区1次面=A-1、A区2次面=A-2、B区2次面=B-2とし、区・次面表記のあとに各遺構名(略記号・番号)を示している。

奈良・平安時代

・A-1 SB2

隅丸方形の住居である。遺構東側は調査区外となるため、全体の半分ほどの検出となった。

カマドは北西壁の中央に位置する。壁面とカマド内部に焼土面と炭化物がみられるが、全体にうすくカマドの形がわかる程度であり、支脚などの構築材は検出されなかった。

覆土からは10～30cm大の石が数点みられはじめた。位置が住居の中央付近で多いことから、意図的に入れられたことも考えられるが、この中で床面に接していると判断されたのは図11にある4点のみである。なお、カマドの前面に近い位置であったが、カマドの抽石などは含まれてはなかった。

床面は、貼り床はないが全体的にしまっており良好な状態であった。出土土器は破片を中心としており、量は少なく覆土中出土のものは遺構中央で検出した石の周辺からとカマドの焼土面上からである。

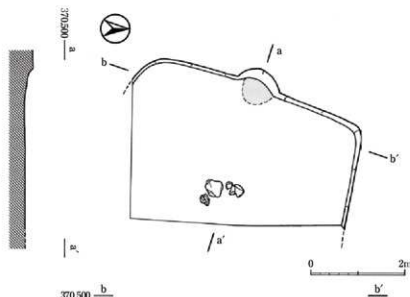


図11 A-1 SB2実測図(1:80)



A-1 SB2全景(東から)

Ⅲ 調査の成果

・A-1 SB3

カマド部分のみの検出で北東方向を向く(図7)。カマドの焼土と炭化面が良好にみられたことから、ここを中心として住居の範囲の検出を行ったが、遺構の立ち上がりなど、範囲を確認することができなかった。

カマド部分は、幅約60cmにわたり全体に焼土化し堅く、上面の覆土中から炭化物を多く含んでいた。袖部付近には硬化面に接して須恵器片と石がみられる。床面は、カマド前面の硬化面からグリッドを設定し検出を行ない明確に確認できた位置である。



A-1 SB3カマド(南から)

・A-1 SB4・9

検出時から特に土器が多く出土しはじめていた範囲に位置する。

複数遺構が重複していることから、上面(SB4)から掘り下げていった。SB9は深さがあることが予想されトレンチで床面の確認を行った。炭化物が広がる面に達したため床面と判断したが、全体を掘り下げたところその下から硬化した面を検出した。

下の硬化した面がSB9の床面であり、上の炭化物があった面については、兩住居の完掘後に調査区の壁面で確認したところ、炭化面が帯状に広がり範囲からも重複するSB4よりも下に位置する別遺構で、再度検出を行った結果、SB4とSB9の間にも遺構が存在していたことを確認した。図12に示した範囲であり、床面は壁面で確認した焼土面の高さとも一致する。

遺物は完形のものも含め覆土中からも多い。須恵器を中心に、SB4覆土中からは円面硯(破片)(図34)と双耳環(図27-20)が出土している。

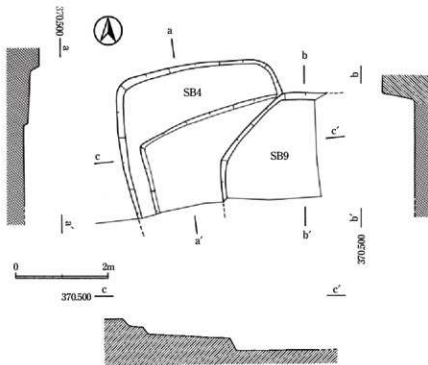


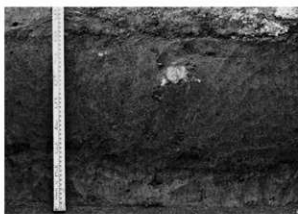
図12 A-1 SB4・9実測図(1:80)



A-1 SB4・9全景(北西から)



A-1 SB9 (北西から)



A-1 壁面炭面確認 (西から)

・A-1 SB5・6

SB5にSB6が重複する。両方ともカマドは南を向き、住居南壁の中央に位置する。遺構は北と東側が攪乱の破壊を受けているため、カマドを中心とした一部の検出となった。

SB5はカマド内に炭化材と焼土面が残るのみであるが、住居中央床面では、須恵器破片がかたまっていた。

SB6はSB5と切りあい、煙道は明瞭で、カマド部分は焼土が残り、周囲には石がみられたが、構築材として位置をとどめているものはみられない。覆土中からの土器は少ないが、床面は締まった良好な状態である。

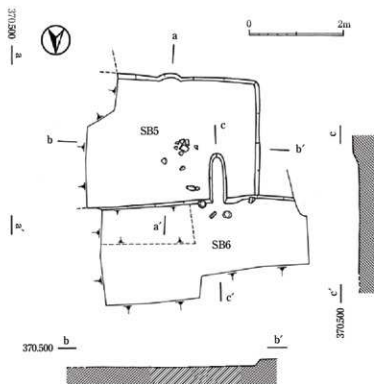


図13 A-1 SB5・6実測図 (1:80)



A-1 SB5・6全景 (北から)



A-1 SB6カマド、SB5床面土器 (北から)

Ⅲ 調査の成果

・A-2 SB1

調査区東端に位置し、北・東側と調査区外となるため、遺構の検出は南西方向のカマドと周辺のみである。

カマドは壁面から堅く焼けており、前面の床面でも炭化物がのった硬化した面がみられる。覆土中からも炭化物が多く入っていた。床面は堅くしまっている。土器は破片で、カマド周辺を中心に出土している。

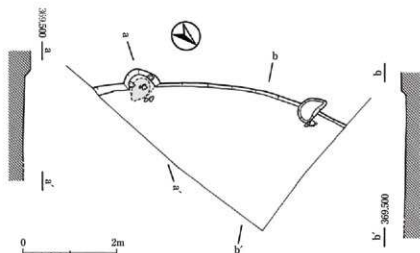


図14 A-2 SB1実測図(1:80)



A-2 SB1 全景(東から)



A-2 SB1 カマド(北東から)

・A-2 SB2・3

調査区東端の掘削に切られ、南側は調査区外となることから全体に1/3~1/2ほどの検出である。SB3がSB2と切りあい、カマドはSB2が北東壁、SB3は北西壁に位置する。検出面から床面までの深さは、SB2が16cm、SB3が32cmを測る。

SB2の方が検出面からの掘り込みが浅く不整形な平面形となっている。カマド内は壁面外に焼土面と炭化面が広がりが硬化しているが、住居壁面より内側にはみられない。床面は明確で、住居の中央では部分的に炭化物が



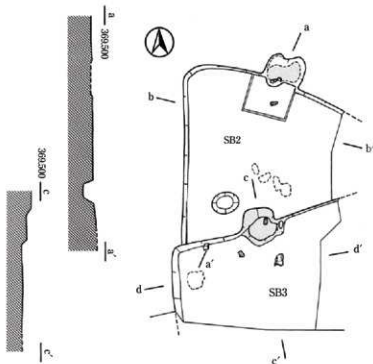
A-2 SB2・3 全景(南から)



A-2 SB3 カマド(南から)

広がっている。

SB3は床面からの掘り込みが30cmをこえる。SB2よりもカマドの向きはやや西側となる。カマドが住居の壁面から外に出た形であり、焼土と炭化面が堅くしまっている。カマド壁の硬化した焼土面と両袖部分が一体となっており中央に焼土面が残る。カマド前面の様子が不明であったSB2についても、同様の形であったことが考えられる。床面は明瞭で部分的に炭化物がみられる。なお、SB2の東側、攪乱との境に煙道を検出しており(図8)、もう1軒別の住居が重複していた可能性が考えられる。



・A-2 SB5

西側の遺構の多くが調査区外となっていることから、カマドを中心とした1/4ほどの検出となった。

カマドは西向きで壁面の中央に位置する。煙道はなく、袖石は住居壁面に近い位置に左右が残り、袖部は全体が焼けた状態である。カマド内から前面にかけて焼土が厚く堆積しており、その上部と中からは土器が多く出土した。また、カマドの前面にもカマド内と同様に焼土の塊と土器が広がっている。この他にも床面には土器がみられた。なお図29-56は矢板設置工事中に見つかったものである。

規模は検出できた南北方向で6.2mの大型の住居である。

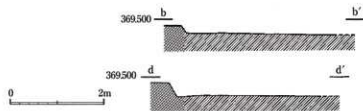


図15 A-2 SB2・3実測図(1:80)

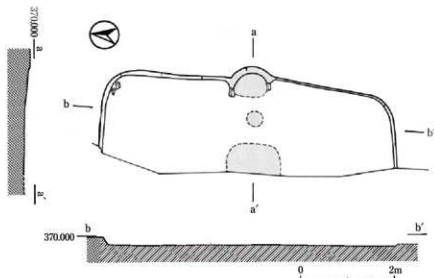


図16 A-2 SB5実測図(1:80)

Ⅲ 調査の成果



A-2 SB5 全景 (北西から)



A-2 SB5 床面焼土・土器 (南西から)



A-2 SB5 カマド (西から)



A-2 SB5 カマド焼土下 (西から)

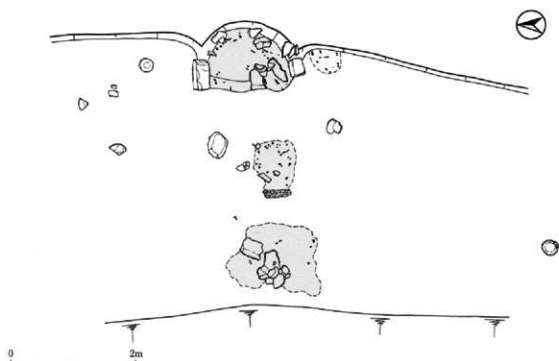


図17 A-2 SB5 カマド周辺土器・焼土出土状況実測図 (1:30)

・A-2 SB6

平面形の隅丸方形で、検出面からの掘り込みは西側（深い方）で50cmほどの深さがある。覆土中から土器片がみられたが総量としては多くはない。カマドの検出はなく、南西側を中心とした炭化物面の広がり、主に北側に焼土がみられた。

床面は、貼り床などは見られなかったが、検出は明瞭であった。壁面は平面での検出が困難であったため、トレンチを入れながら確認を行った。覆土中から所々でみられた炭化物の範囲は狭いが床面で広がり確認できる箇所がみられる。



A-2 SB6 全景（南から）

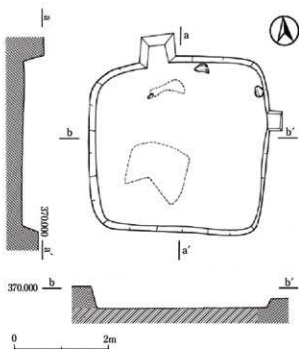


図18 A-2 SB6実測図（1：80）

・A-2 SB7

隅丸の正方形に近い形で、遺構の東側は攪乱が重複していることから検出はできなかった。

カマドは北西壁の中央東寄りに位置する。覆土中には炭化物が混じっていた。煙道と両袖石・天井石、小型の堿（図29-69）を逆さにした支脚を検出した。袖部分では東側では表面が焼土化した粘土袖を確認した。

天井石は長さが約50cmで袖石の間隔と同じである。カマド内部には炭化物が厚く堆積し、下には焼土面が広がる。覆土の掘り下げ時には、カマドの外側でも炭化物が多くみられ、覆土に混じった状態であるが、面で確認できるほどであった。検出面からの床面までの深さは西側で36cmほどで、床面は堅く

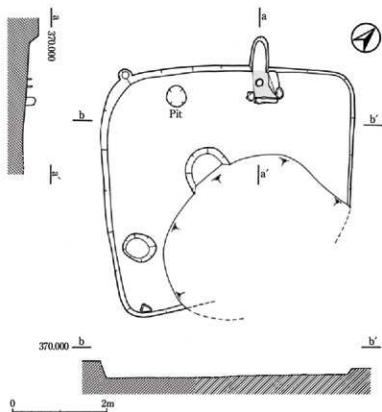


図19 A-2 SB7実測図（1：80）

Ⅲ 調査の成果

明瞭であるが、床面からの土器の出土はほとんどみられなかった。

西側床面検出のピットからは、弥生時代中期の土器を検出した。大型の甕（図33-124）をはじめ、住居覆土中からも数点検出したことから、床面検出後に周囲の確認を行ったが、床面下からはこのほかの人為的な掘り込みはみられなかった。住居が弥生中期の遺構に重複していたことが考えられる。



A-2 SB7 全景 (南東から)



A-2 SB7 カマド検出 (南東から)



A-2 SB7 カマド (南東から)

・B-2 SB1・2

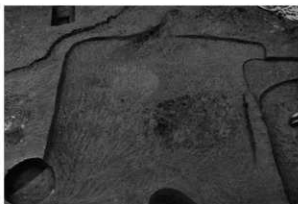
調査区東側で、一部切りあった状態で検出。この面では包含層から遺構面の一部が攪乱によってけずられていることから、検出面からの掘り込みは全体的に浅かった。

SB1は検出時から炭化物が確認され、床面でも北側を中心に広がっている。遺構東側は調査区外となり、はじめにトレンチを入れたことから全体を検出することができなかったが、東側の炭化面の範囲から北壁にカマドが位置し、西側炭化面の範囲を中心に土器が出土している。

SB2は掘り込みが浅い状態であったが、北壁に煙道と前面に炭化面があり、SB1と同じく北側にカマドが位置している。



B-2 SB1 全景 (北から)



B-2 SB2 全景 (南から)

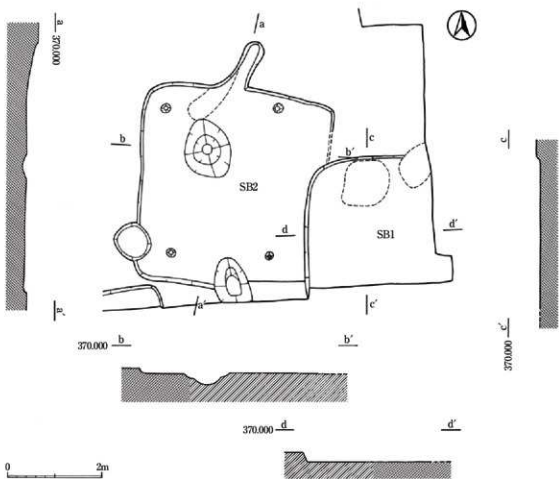


図20 B-2 SB1・2実測図(1:80)

・A-2 SK5

隅丸長方形で、北東隅は掘乱により破壊をうけているが、覆土中から一部焼土がみえはじめ、遺構北東側には土器と焼土面がみられる。

土器は、検出時から壁面に接しているものと、床面上の焼土内で検出したものがある。

遺構は2.5×1.8mと小型で、焼土面は如と確定しえないことも含め住居以外の遺構と考えられる。



A-2 SK5全景(南から)

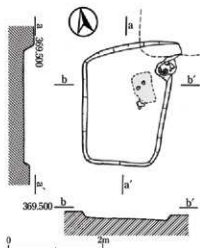


図21 A-2 SK5実測図(1:80)

弥生時代中期

・A-2 SB4

調査区の西側の奈良・平安時代の住居と隣接する位置にあるが、重複する遺構はない。主軸は南北方向よりやや西に向く。遺構南側は広くグライ化した様な緑色および灰色の面であり検出が困難であったことから、立ち上がりを確認することができなかった。

住居は検出面から床面まで、深いところでは30cm以上をはかり、北側を中心に床面直上には炭化材がみられた。炭化物は面的に広がり、中には材の形が残っているものがみられた。炭化材と同じ位置には土器も多く出土しており、つぶれた状態での出土で復元により1個体となるものもある。炭化物および土器は床面直上に位置し、南端では扁平片刃石斧(図35)が出土した。

炭化物下からは、柱痕を7本分を検出した(P28)。直径は16cm~20cmで住居の長辺(南北方向)に3本、短辺(東西方向)に2本並び、北端は短辺の間に1本入った3本が位置する。それぞれの間隔は長辺が180~195cm、短辺は225~270cmで、短辺は南側の間隔が狭くなっている。住居の平面形は隅丸長方形で、柱の位置から南側に向かって幅が狭くなっておりやや不整形である。規模は短辺4.8m、長辺は柱痕の位置から6.4mと推定され、住居のほぼ中央には地床炉が1ヶ所、炭化面の下から検出された。

特筆されることとして、土器が住居内隅に土器がまとまって出土している。検出時に遺構の西端で土器の一部を確認していたことから、遺構掘り下げを土器の周辺から行っていったところ、土器は複数が一箇所に集中して

いたため、トレンチを入れて範囲を確認した。土器は住居の北西角の付近に全部で10個体(壺9、甕1)が横位置と縦位置に置かれ、向きは一定ではなく、およそ125×90cmの範囲に隙間なく置かれるよう配置されていた。土器は割れており、内部には覆土とは違う灰色の泥や炭化物が堆積していた。

この土器内に堆積した土については土器ごとに中の土を取り上げて、科学分析を行なった(第Ⅳ章自然科学分析)。その結果、土器内には少量であることから土器内への貯蔵や埋納といった可能性は見出せないものの、栽培種のイネやアワ、野生と栽培の可能性のあるマメ科などの種実が確認された。また堆積していた泥質土からは、河川の氾濫の影響を受けた可能性が示されている。なお、その他の床面の土器とは違い、これらの土器の下からは炭化物がなかったことから、炭化物よりも先に置かれていたことが考えられる。

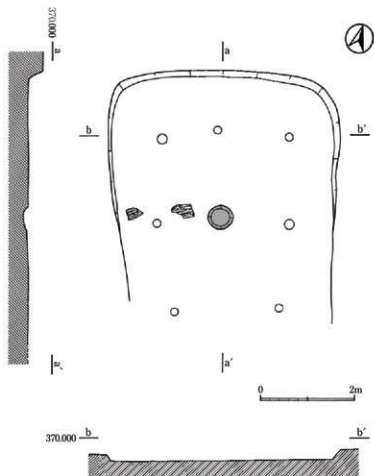


図22 A-2 SB4 実測図(1:80)

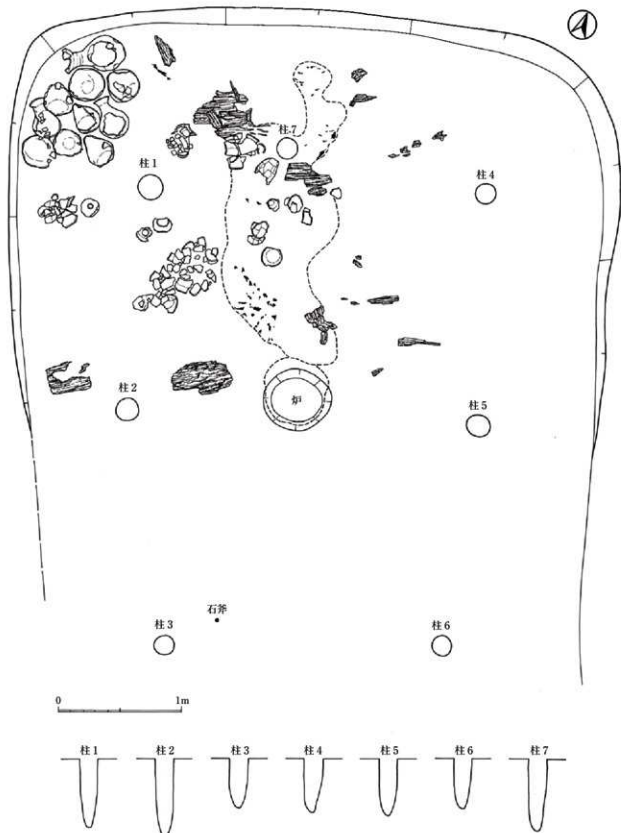


图23 A-2 SB4床面土器·炭化材、柱痕检出状况图(1:30)

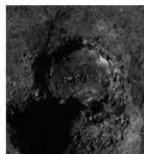
Ⅲ 調査の成果

・SB4 柱痕

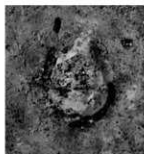
柱痕は、検出したもの全部で柱材部分は黒色または灰色の粘土質となっており、内部には炭化物がみられる状態で、材は目視できるものと混じるものとがみられた。中でも柱2は炭化材として確認できるほどの良好な状態のものであった。以上のような検出状態であったことから柱痕の平面と断面の確認を行ない、さらに材の樹種同定を目的とした自然科学分析(第IV章)を行なった。

柱の下部の確認は、柱部分を中心に南側に約50×30cmのトレンチを設定し半裁をして行った。床面からの深さは浅いもの(柱3)で39cm、深いもの(柱2)で62cmであった。粘土質の土が入り、炭化物が混じる範囲を柱1で27cm、柱2で13cm、柱4で23cm、柱7で29cmの深さで確認した。

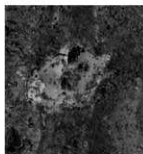
半裁した柱部分はそのまま取り上げ、分析を行なった。樹種同定の結果、柱材にはコナラおよびエノキが使われていることがわかり、この柱材は主柱であることから、住居には特にエノキ属の樹種が主体的に使われていたことが考えられる。



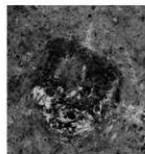
柱1検出



柱2検出



柱4検出



柱7検出

<柱痕>

(径・深さ)

柱1：径20cm・深54cm

柱2：径18.5cm・深62cm

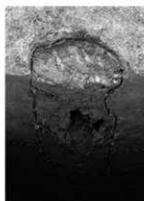
柱3：径17cm・深39cm

柱4：径16cm・深43cm

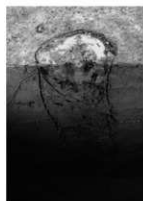
柱5：径18.5cm・深46cm

柱6：径16cm・深41cm

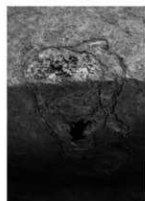
柱7：径19cm・深59cm



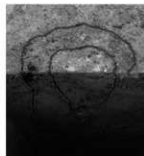
柱1断面



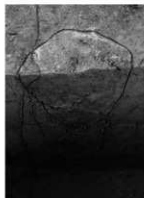
柱2断面



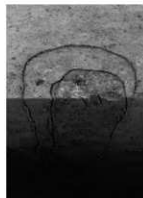
柱3断面



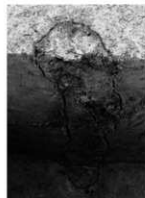
柱4断面



柱5断面



柱6断面



柱7断面



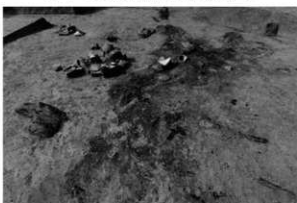
A-2 SB4 隔土器出土状況 (南東から)



A-2 SB4 隔土器出土状況 (北西から)



A-2 SB4 床面土器・炭化物出土状況 (北東から)



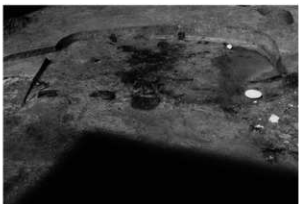
A-2 SB4 床面土器・炭化物検出状況 (南東から)



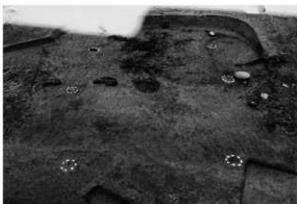
A-2 SB4 床面出土土器



A-2 SB4 床面土器、柱痕検出



A-2 SB4 全景 (南から)



A-2 SB4 全景 (柱痕検出) (南から)

Ⅲ 調査の成果

・A-2 SB8

調査区南側に位置し、遺構のほとんどが調査区外となる。工事に伴う矢板設置作業時からわずかではあるが壁面から土器が確認できていた。

検出面から床面までの掘り込みは20cm強、床面は広く明瞭であることなど、遺構の検出は一部ではあるが、推測される規模などから住居跡とした。

壁面に接した位置には、床面から検出したピットが1基あり、床面からの掘り込みは48cmほどあるが、土器はみられなかった。

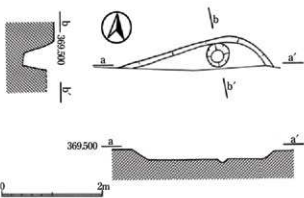


図24 A-2 SB8実測図(1:80)

・A-2 SK4

SB4の南側の検出面から土が変色した場所に位置し、特に遺構東側は緑色のグライ化した状態であり当初は明確な検出ができていなかったが、覆土中から土器が多く出土し始め、じょじょに石と混在している様子を確認した。始めは西側の範囲が分からず土器を検出した位置でとめたが、西側にグリッドを設定し掘り下げたことにより遺構全体を検出した。

280×110cmの不整形な楕円形で掘り込みは凹凸があるかたちで深さはおおよそ48cmである。土器は石と混在した状態で底部まで遺構内に広がっており大きく3つに分かれる。土器は壺と甕を主に瓶などが出土しており(図32・33-105~119)、石は10~25cm大の円礫で、加工などの痕跡はみられなかった。

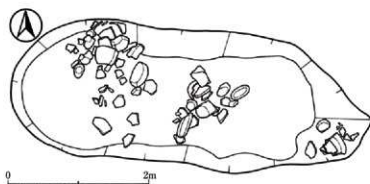


図25 A-2 SK4土器・石出土状況図(1:30)

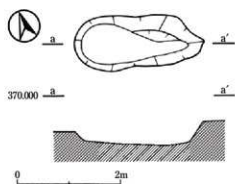


図26 A-2 SK4実測図(1:80)



A-2 SK4東側土器出土状況(南から)



A-2 SK4全景、西側土器出土状況(南から)



A-1 SB1 (南から)



A-1 SB5・6・7・8 (北から)



A-1 調査区西側住居 (南東から)



A-2 SB1、SK1、SD1 (東から)



A-2 SB8、SK2・3 (東から)



B-2 SD1 (南東から)



B-2 SD1ベルト断面 (南から)



B-2 SD2 (南から)

3 遺物

1 土器

<奈良・平安時代>

土器は、住居からの出土が中心である。遺構は検出状況が良好でないものが多いことから、検出数に対して全体の出土量は多くはないものの、この中でも比較的まとまって出土した住居の土器から、本遺跡での奈良・平安時代の遺構の展開の時期について示す。

A-1 SB2：須恵器杯は底部糸切りのみ。土師器は杯が内黒処理で、長胴甕はケズリ調整である。

A-1 SB4：須恵器を主体とし、須恵器杯は底部ヘラ切りと糸切りの両方がみられる。高台付杯では高台の底部の中央がナデにより大きく凹んでいる（17・18）。蓋はかえりがなく器高は低く、16は表面に自然軸がある。双耳杯は高台付杯で、胴部中央より上の位置に平面台形の板状の耳が付くタイプのもので、円面視も同じ覆土からの出土である。

A-1 SB5：須恵器杯はヘラ切りと糸切りが共存するが、糸切りの方がやや多い。

A-1 SB9：SB4と重複し下面に位置することから、図版に掲載した遺物の分類は、SB4とSB9の間にある別遺構の可能性が考えられる炭化面を境とした。須恵器杯はヘラ切り、土師器蓋（39）は須恵器模倣の内黒土器で、つまみ部分は欠損するが、天井部が平坦で端部に向かって広がる。

A-2 SB5：須恵器杯は底部糸切りのみで、高台付杯は底部から胴部がまっすぐに立ち上がる箱形のもので、口径12.8cm（53・54）と口径15cmで器高が6～6.8cm（55・56）の大型とがある。57は黒書で底部に「大」が一文字。土師器甕は小型品がロクロ整形で、大型はハケ調整である。

B-2 SB2：須恵器は、高台付杯は底部ヘラ切りで、底部はやや丸みを持つが胴部は平坦で外側に開く。高甕がみられ、土師器甕は非ロクロ（ハケ調整）である。

出土数が最も多い須恵器杯では、底部調整がヘラ切りのみ（A-1 SB9）からヘラ切りと糸切りが共存する段階（A-1 SB4・5）、さらに糸切りのみとなる段階（A-2 SB5）との変化がみられる。また須恵器杯は、A-2 SB4をはじめ蓋の出土も多く、蓋杯セットとなるものが多い。土師器では、古墳時代からの影響が残る高杯や非ロクロ整形の杯がみられるが、内黒処理のものも含めた杯の大半と小型甕ではロクロ整形が主体となる。検出面などからの出土も含め、土師器よりも須恵器の方が出土量が多い。

なお、A-1 SB4の双耳杯は、覆土出土であるが遺構の時期から8世紀後半に、同じ出土位置である円面視についても、全体の内の一部であることから視の形態によって時期を推測することはできないが、出土位置から同時期のものと考えられる。

住居の時期についてはおおよそ、奈良時代～8世紀中（A-1 SB9）、8世紀中～後半（A-2 SB2、B-2 SB1～3ほか）、8世紀後半（A-1 SB4ほか）。奈良時代～平安時代～8世紀末（A-2 SB5）。平安時代～8世紀末～9世紀初頭（A-1 SB5・8、A-2 SB3）、9世紀前半（A-1 SB2）で、奈良時代末から平安時代初頭にかけての時期が主体となっており、奈良時代のものがやや多い。以上から、住居は8世紀後半から9世紀初頭を中心に、8世紀中頃～9世紀前半の間に展開していたものと考えられる。

A区 1次面

A-1 SB2 (1~9)



1



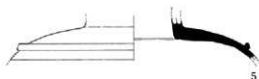
2



3



4



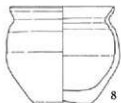
5



6



7



8

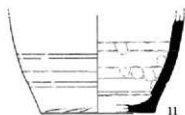


9

A-1 SB3 (10·11)



10



11

A-1 SB4 (12~26)



12



13



14



15



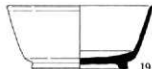
16



17



18



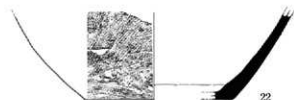
19



20



21



22



23



24

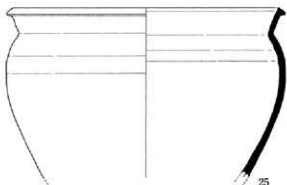
A-1 SB1 (27·28)



27



28



25



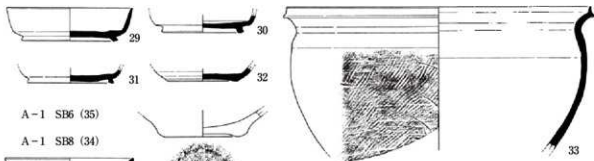
26

0 10cm

图27 出土土器实测图1 (1:4)

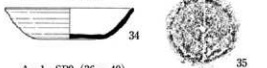
III 調査の成果

A-1 SB5 (29~33)

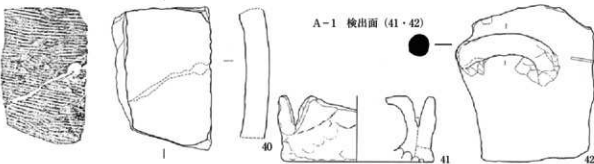


A-1 SB6 (35)

A-1 SB8 (34)

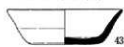


A-1 SB9 (36~40)

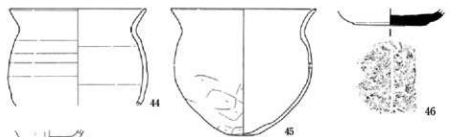


A区 2次面

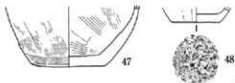
A-2 SBI (43)



A-2 SB2 (44~46)



A-2 SK5 (47~48)



0 10cm

A-2 SB3 (49~51)

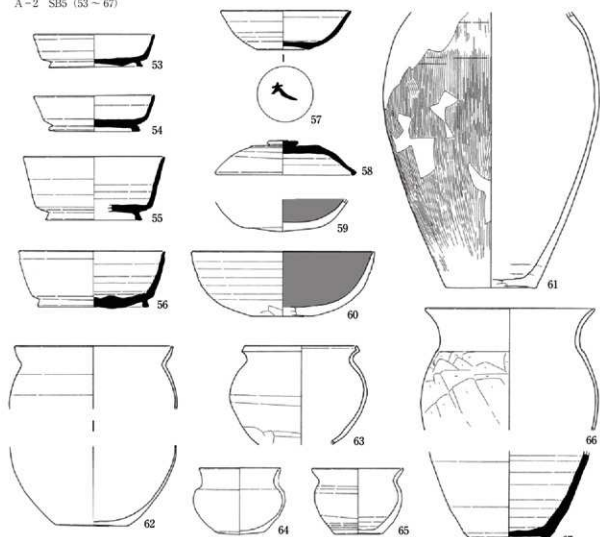


A区 試掘 (52)

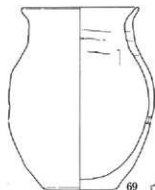
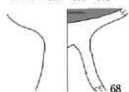


图28 出土土器実測图2 (1:4)

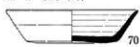
A-2 SB5 (53-67)



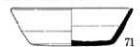
A-2 SB7 (68-69)



A-2 SB6 (70)



A-2 SK2 (71)



A-2 検出 (72-75)



B区 2次面

B-2 SB1

(76-79)



B-2 SB3 (80)



B-2 SD2 (81)



0 10cm

图29 出土土器实测图3 (1:4)

<弥生時代中期>

検出遺構は、A-2SB4、SB8、SK4、SB7床面下ビットである。住居、土坑、ビットと性格が異なる遺構を全部で4カ所確認したのみであるが、土器はSB4、SK4で比較的まとまって出土している。

A-2SB4

器種は壺、甕が主である。このうち大型のものは住居隅に集中して出土しており、これよりも小型のものが床面からの検出である。住居隅出土の壺(82~91)は口縁部および頸部が欠損しているが、82・88を除き胴部はミガキ調整で施文はなく、文様は口縁部・頸部のみである。82は器高47cmと一番大きく、受け口口縁で縄文地に山形のヘラ沈線が描かれ、沈線内には赤色塗彩が施されている。頸部も縄文地にヘラ沈線であるが、横線6~7本(上下が途中で切れる)を同位置で5カ所止めており、簾状文に似た文様となっている。88は懸垂文で頸部から胴部にかけて文様があるもので、93と同様に胴部に縄文とヘラ沈線(横線・山形)に貼りつけがある。また、88は懸垂文の周囲に刺突文がめぐる古い様相を残している。

壺 大きさ-I: 大型82・90・92・103(92・103床面、ほか住居隅)、II: 小型93・94・100~102(床面)

器形-I: 頸部が細く胴部最大径が胴部下半にある、いわゆるいちじく形。

口縁-I: 受け口状82(赤色塗彩)、II: 外反83・92・102、III: 突起101・103

文様-I: 全体(懸垂文)88・93

II: 口縁・頸部のみ(縄文・ヘラ沈線文)82~87・89・90・92・94・(101~103)

壺は文様が口縁・頸部のみのも(文様-II)が大半を占める中で、口縁から胴部にかけて文様のある懸垂文が含まれている。懸垂文など全体に文様があるものと比べて、時期が新しくなるにしたがい施文範囲が少なくなっていくと考えられ、このような文様の少ないものが数を増やしていく段階においても古い要素を持つものが並行して存在している。また、文様位置は同じ(文様-II)中で口縁部は外反のみ(口縁-II)のほか受け口状(口縁-I)と4~5カ所の突起を持つもの(口縁-III)とがある。

甕は、大型は住居隅の91のみで、ほかは床面出土の中・小型である。胴部文様は羽状文(91・95・96・98)と波状文(97)であり、頸部は簾状文、95は波状文である。なお柳描きの柳状工具の歯(柳)の単位はおおよそ6~7本であるが96のみ3本である。台付甕(99)はヘラ描きで、半分は山形文であるがもう半分はほぼ直線に近い形となっている。

竪穴住居の平面形の変遷をふまえば、SB4は隅丸長方形であることから中期後半の中でも新しい段階であることが想定される。また本住居では、一カ所に土器がまとめて置かれた状態で出土しているが、ここでは大型のものと懸垂文または赤色塗彩のある受け口口縁などであり、住居隅と床面出土とは土器を選別している様子がみられる。

A-2SK4

甕が多く、次いで壺が出土している。甕は口縁部が縄文または刺突で、胴部は羽状・刺突・波状文である。壺の文様は、口縁部が縄文(114・115)と刺突(116)、頸部から下は横線・山形・刺突で、文様範囲は口縁~胴部にかけて文様があるもの(114・115・118)と胴部に文様がないもの(116・119)に、器形は頸部が細いもの(SB4器形-I)(115・118)と、口縁から広がる太いもの(114・116)とにわけられる。文様範囲と器形はSB4と同じく一様ではない。

A-2SB8では壺は出土しなかったが、甕(121)は柳状工具の単位が3本であり、羽状文が簡素化した文様である点はSB4(96)と共通する。

弥生時代中期の土器は中期後半であるが、出土土器および遺構の形態からSB4が中期後半の中でも新しい時期に位置することが考えられ、SB8はこれと同時期である。SK4とビットも同じく中期の後半段階であるが、住居よりはやや時期差があるものとみられる。

A-2 SB4

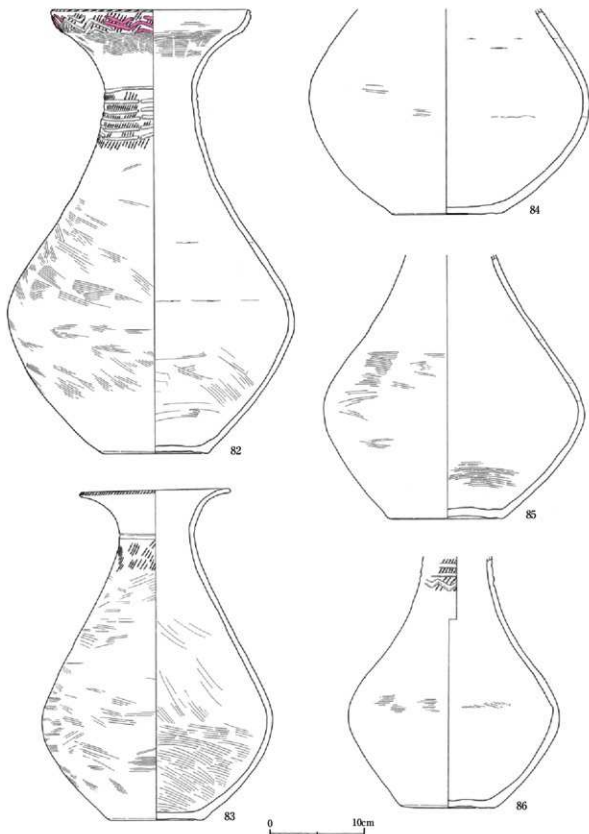


图30 出土土器实测图4 (1:4)

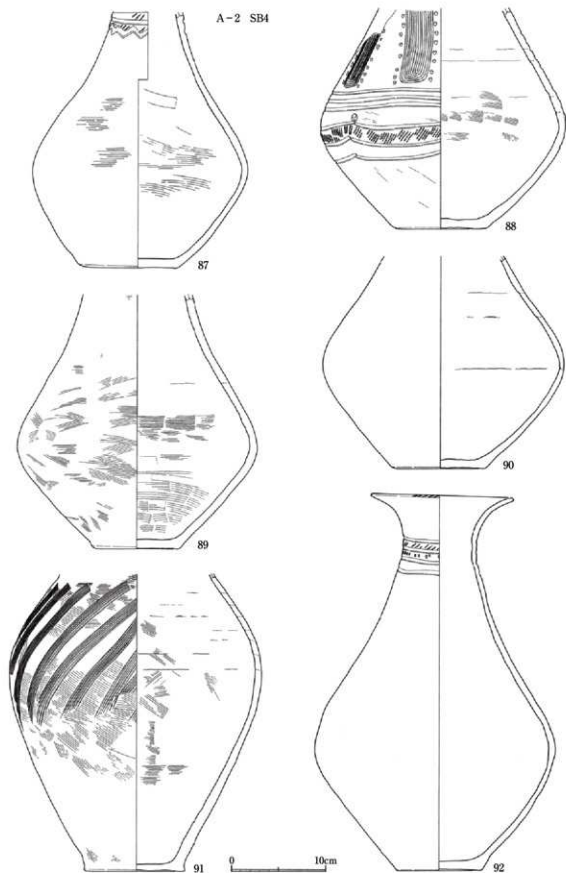


图31 出土土器実測图5 (1:4)

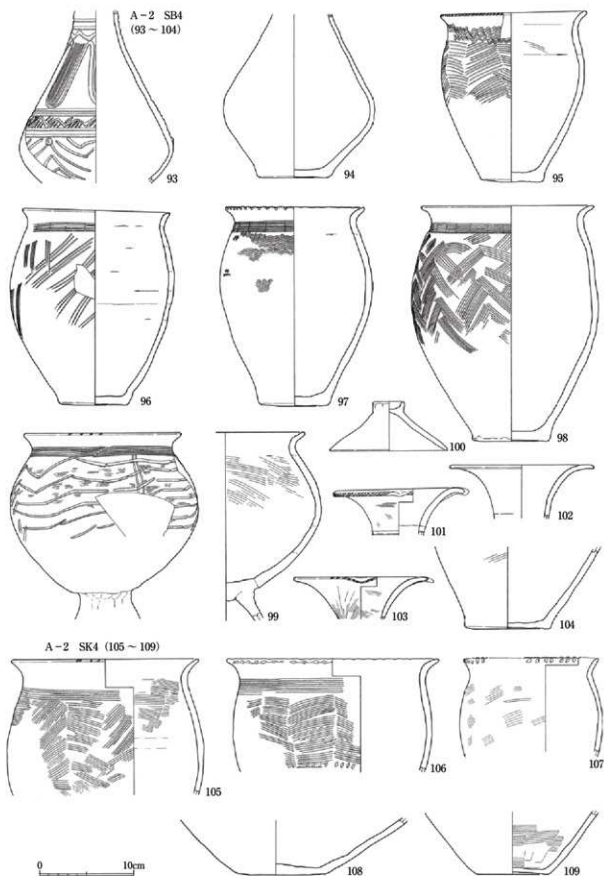


图32 出土土器实测图6 (1 : 4)

III 調査の成果

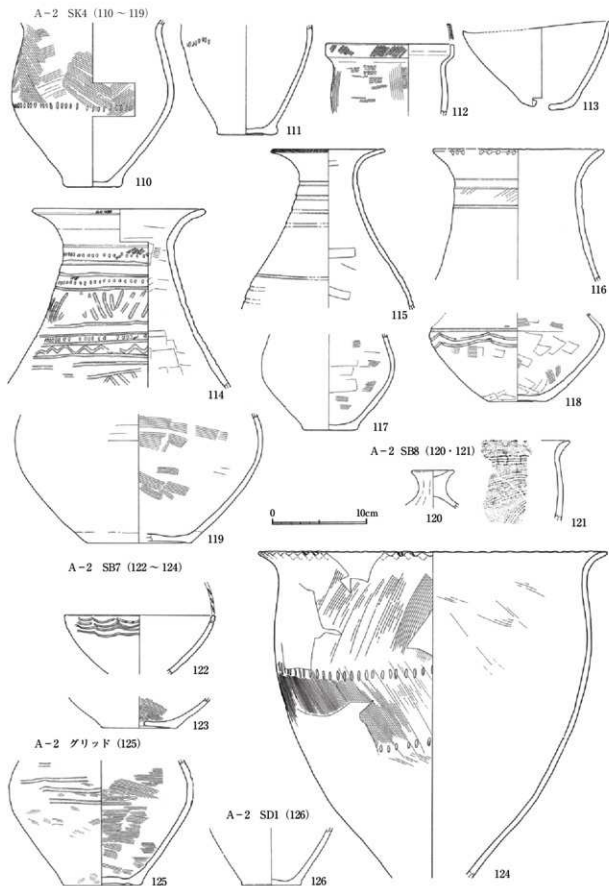


図33 出土土器実測図7 (1:4)

表2 土器観察表

国 版	時 期	種 別	器 種	残存部		調 整・その他		出土遺構			
				部 位	量	内面/外面/底部	区 画	遺構	位置		
27	1	平安時代	須恵器	杯	全形	1/3	ロクロナデ/回転糸切り	A	1	SB2	覆土
	2	平安時代	須恵器	杯	全形	1	ロクロナデ/回転糸切り	A	1	SB2	カマド
	3	平安時代	須恵器	杯	全形	1/2	ロクロナデ/回転糸切り	A	1	SB2	覆土
	4	平安時代	須恵器	高台付杯	底部	1/2	ロクロナデ/回転糸切り	A	1	SB2	覆土
	5	平安時代	須恵器	壺	胴部~胴部	1/4	ロクロナデ・タタキ	A	1	SB2	覆土
	6	平安時代	須恵器	蓋	全形	1/4	ロクロナデ・ケズリ	A	1	SB2	覆土
	7	平安時代	土師器	杯	全形	1/4	内黒/ナデ/ヘラ切り	A	1	SB2	カマド
	8	平安時代	土師器	甕	全形	1	ロクロナデ/ヘラ切り	A	1	SB2	覆土
	9	平安時代	土師器	甕	底部	1	ハケナデ/ケズリナデ	A	1	SB2	カマド
	10	奈良時代	土師器	高杯	杯部~脚部	2/3	内黒/ナデ	A	1	SB3	焼土上
	11	奈良時代	須恵器	壺	胴部~底部	1/3	タタキ/ヘラ切り	A	1	SB3	焼土前
	12	奈良時代	須恵器	蓋	全形	1	ケズリ/ロクロナデ	A	1	SB4	覆土
	13	奈良時代	須恵器	蓋	全形	1/4	ケズリ/ロクロナデ	A	1	SB4	覆土上層
	14	奈良時代	須恵器	蓋	全形	1/2	ケズリ/ロクロナデ	A	1	SB4	覆土上層
	15	奈良時代	須恵器	蓋	天井~端部	1/2	ケズリ/ロクロナデ	A	1	SB4	覆土下層
	16	奈良時代	須恵器	蓋	天井~端部	1/6	ケズリ/ロクロナデ・自然釉	A	1	SB4	覆土上層
	17	奈良時代	須恵器	高台付杯	全形	1/2	ロクロナデ/ヘラ切り	A	1	SB4	覆土
	18	奈良時代	須恵器	高台付杯	全形	1/5	ロクロナデ/ヘラ切り	A	1	SB4	覆土上層
	19	奈良時代	須恵器	高台付杯	全形	1/5	ロクロナデ/ヘラ切り	A	1	SB4	覆土上層
	20	奈良時代	須恵器	双耳	全形	2/3	ロクロナデ/回転糸切り	A	1	SB4	覆土上層
	21	奈良時代	須恵器	杯	全形	1/3	ロクロナデ/回転糸切り	A	1	SB4	覆土上層
	22	奈良時代	須恵器	甕	底部	2/3	タタキ/ロクロナデ	A	1	SB4	覆土
	23	奈良時代	須恵器	壺	口縁部	1/8	ナデ/ロクロナデ	A	1	SB4	覆土上層
	24	奈良時代	須恵器	壺	胴部	一部	縦割文様	A	1	SB4	覆土
	25	奈良時代	須恵器	甕	口縁~胴部	1/4	ロクロナデ・タタキ	A	1	SB4	覆土上層
	26	奈良時代	須恵器	長頸壺	胴部~底部	2/3	ロクロナデ/回転糸切り	A	1	SB4	トレンチ
	27	奈良時代	須恵器	杯	底部	1/2	ロクロナデ/ヘラ切り	A	1	SB1	覆土
	28	奈良時代	須恵器	杯	底部	1/2	ロクロナデ/ヘラ切り	A	1	SB1	覆土
28	29	平安時代	須恵器	高台付杯	全形	1/2	ロクロナデ/回転糸切り	A	1	SB5	床直上
	30	平安時代	須恵器	高台付杯	底部	1/2	ロクロナデ/ヘラ切り	A	1	SB5	床直上
	31	平安時代	須恵器	高台付杯	底部	1/2	ロクロナデ/静止糸切り	A	1	SB5	床直上
	32	平安時代	須恵器	杯	底部	1/2	ロクロナデ/静止糸切り	A	1	SB5	床直上
	33	平安時代	須恵器	甕	底部	1/3	ロクロナデ/タタキ	A	1	SB5	床直上
	34	平安時代	須恵器	杯	全形	1/2	ロクロナデ/静止糸切り	A	1	SB8	覆土
	35	奈良時代	土師器	壺	底部	1	ナデ/木葉痕	A	1	SB6	床直上
	36	奈良時代	須恵器	高台付杯	全形	1/3	ロクロナデ/ヘラ切り	A	1	SB9	覆土
	37	奈良時代	須恵器	杯	全形	1	ロクロナデ/ヘラ切り	A	1	SB9	覆土
	38	奈良時代	須恵器	杯	全形	1/2	ロクロナデ/ヘラ切り	A	1	SB9	覆土
	39	奈良時代	土師器	蓋	全形	1/3	ナデ/黒色処理	A	1	SB9	覆土
	40	奈良時代	須恵器	壺	胴部	一部	ナデ/タタキ	A	1	SB9	ナデ
	41	平安時代	土師器	甕	全形	1/4	指ナデ	A	1	検出面	
	42	平安時代	須恵器	甕	把手	1	胴部:タタキ/把部:ナデ	A	1	検出面	
	43	奈良時代	須恵器	杯	全形	1/2	ロクロナデ/ナデ/ナデ	A	2	SB1	床面
	44	奈良時代	土師器	壺	口縁~胴部	1/4	ロクロナデ/ナデケズリ	A	2	SB2	カマド
	45	奈良時代	土師器	甕	全形	1/4	ナデ/ナデケズリ	A	2	SB2	覆土
	46	奈良時代	須恵器	甕	底部	1/3	ロクロナデ/ヘラ切り	A	2	SB2	覆土

Ⅲ 調査の成果

図版	番号	時期	種別	器種	残存部		調整・その他		出土遺構		
					部位	量	内面/外面/底部	区	面	遺構	位置
28	47	奈良時代	土師器	甕	胴部～底部	1	ハケ～ナデ/ハケ	A	2	SK 5	覆土
	48	奈良時代	土師器	甕	底部	1	ナデ/ケズリ/網代痕	A	2	SK 5	覆土
	49	平安時代	土師器	甕	口縁～胴部	1.4	ナデ・カキメ/ロクロナデ	A	2	SB 3	床面No.1
	50	平安時代	土師器	甕	口縁～胴部	1.4	ハケ～ナデ/カキメケズリ	A	2	SB 3	床面No.3
	51	平安時代	土師器	杯	全形	1.3	内黒/ロクロナデ	A	2	SB 3	覆土
	52	平安時代	須恵器	杯	全形	2.3	ロクロナデ/回転糸切り	A	2	試掘	トレンチ B
29	53	奈良～平安時代	須恵器	高台付杯	全形	3.4	ロクロナデ/回転糸切り	A	2	SB 5	床面
	54	奈良～平安時代	須恵器	高台付杯	全形	3.4	ロクロナデ/回転糸切り	A	2	SB 5	床面
	55	奈良～平安時代	須恵器	高台付杯	全形	1.3	ロクロナデ	A	2	SB 5	床面
	56	奈良～平安時代	須恵器	高台付杯	全形	4.5	ロクロナデ/回転糸切り	A	2	SB 5	床面
	57	奈良～平安時代	須恵器	杯	全形	1.2	ロクロナデ/回転糸切り 墨書「大」	A	2	SB 5	床面
	58	奈良～平安時代	須恵器	蓋	全形	1	ロクロナデ・ヒダスキ	A	2	SB 5	床面
	59	奈良～平安時代	土師器	杯	底部	1	内黒/ケズリ	A	2	SB 5	床面
	60	奈良～平安時代	土師器	杯	全形	1.4	内黒/ロクロナデケズリ	A	2	SB 5	カマド
	61	奈良～平安時代	土師器	甕	胴部～底部	1.4	ナデ/ハケ～ナデ	A	2	SB 5	床面
	62	奈良～平安時代	土師器	甕	全形	1.3	ナデ/ナデケズリ	A	2	SB 5	覆土～床
	63	奈良～平安時代	土師器	甕	口縁～胴部	3.4	ナデ/ナデケズリ	A	2	SB 5	覆土～床
	64	奈良～平安時代	土師器	甕	全形	1	ナデ/ナデケズリ	A	2	SB 5	床面
	65	奈良～平安時代	土師器	甕	全形	3.4	ロクロナデ/ナデ・カキメ	A	2	SB 5	床面
	66	奈良～平安時代	土師器	甕	口縁～胴部	1.4	ナデ/ナデケズリ	A	2	SB 5	床面
	67	奈良～平安時代	須恵器	長頸壺	胴部～底部	1.3	ロクロナデ・自然釉	A	2	SB 5	床面
	68	奈良時代	土師器	高杯	杯下～脚部	1.3	内黒/ミガキ	A	2	SB 7	覆土～床
	69	奈良時代	土師器	甕	全形	2.3	ミガキ～ナデ/ナデ・ミガキ	A	2	SB 7	カマド
70	奈良時代	須恵器	杯	全形	1.2	ロクロナデ/ヘラ切り	A	2	SB 6	覆土～床	
71	奈良時代	須恵器	杯	全形	1.3	ロクロナデ/ケズリ	A	2	SK 2	覆土	
72	奈良時代	土師器	杯	底部	1	内黒/ミガキ	A	2	検出面		
73	奈良時代	土師器	杯	底部	1	内黒/ミガキ～ナデ	A	2	検出面		
74	奈良時代	土師器	杯	口縁～胴部	1.3	ミガキ/ミガキ	A	2	検出面		
75	奈良時代	須恵器	高盤	脚部	1.2	ロクロナデ/ロクロナデ	A	2	検出面		
76	奈良時代	須恵器	蓋	全形	3.4	ケズリ～ロクロナデ	B	2	SB 1	床面	
77	奈良時代	須恵器	高台付杯	全形	2.3	ロクロナデ/ヘラケズリ	B	2	SB 1	床面	
78	奈良時代	土師器	甕	底部	1.3	ハケ/木葉痕	B	2	SB 1	覆土	
79	奈良時代	須恵器	高盤	脚部	1.2	ロクロナデ	B	2	SB 1	床面	
80	奈良時代	須恵器	高台付杯	全形	3.4	ロクロナデ/ヘラケズリ	B	2	SB 3	覆土	
81	奈良時代	須恵器	蓋	天井部	3.4	ロクロナデ	B	2	SD 2	覆土	
30	82	弥生時代中期	弥生土器	壺	全形	2.3	口縁・縄文・山形文赤彩 顔部・縄文・擬似藤状文	A	2	SB 4	床隅No.1
	83	弥生時代中期	弥生土器	壺	全形	4.5	顔部・横直線・縄文	A	2	SB 4	床隅No.4
	84	弥生時代中期	弥生土器	壺	胴部～底部	3.4	ハケ・ミガキ	A	2	SB 4	床隅No.3
	85	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部～底部	3.4	ミガキ	A	2	SB 4	床隅No.2
86	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部～底部	2.3	顔部・縄文・横線・山形文	A	2	SB 4	床隅No.10	
87	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部～底部	4.5	顔部・縄文・横線・山形文	A	2	SB 4	床隅No.5	
88	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部～底部	2.3	垂下文・刺突・縄文・ 横沈線 3・連弧文	A	2	SB 4	床隅No.6	
89	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部～底部	1.2	ハケ～ミガキ	A	2	SB 4	床隅No.7	

国 版	時 期	種 別	器 種	残存部		調 整・その他		出土遺構			
				部 位	量	内面/外面/底部	区	面	遺構	位置	
31	90	弥生時代中期	弥生土器	壺	胴部～底部	3/4	ミガキ	A	2	SB4	床面No.8
	91	弥生時代中期	弥生土器	甕	頸部～底部	2/3	櫛描斜線、ミガキ	A	2	SB4	床面No.9
	92	弥生時代中期	弥生土器	壺	全形	4/5	頸部：縄文・横沈線	A	2	SB4	床面No.5
32	93	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部～胴部	1/2	垂下文、縄文・山形文、貼付・重山形文沈線赤彩	A	2	SB4	床面No.9
	94	弥生時代中期	弥生土器	壺	胴部～底部	4/5	ナデ・ミガキ	A	2	SB4	床面No.5
	95	弥生時代中期	弥生土器	甕	全形	4/5	縄文・波状文-羽状文	A	2	SB4	床面No.8
	96	弥生時代中期	弥生土器	甕	全形	1	簾状文-羽状文	A	2	SB4	床面No.1
	97	弥生時代中期	弥生土器	甕	全形	4/5	簾状文-波状文	A	2	SB4	床面No.6
	98	弥生時代中期	弥生土器	甕	全形	4/5	簾状文-羽状文	A	2	SB4	床面No.7
	99	弥生時代中期	弥生土器	台付甕	口縁～脚部	4/5	櫛描直線-山形・直線	A	2	SB4	床面No.11
	100	弥生時代中期	弥生土器	蓋	全形	3/4	ミガキ	A	2	SB4	床面No.9
	101	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～頸部	2/3	口縁突起4、口唇：縄文 頸部：沈線	A	2	SB4	床面No.11
	102	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～頸部	1/2	頸部：沈線	A	2	SB4	床面No.3
	103	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～頸部	4/5	口縁突起、口唇：縄文	A	2	SB4	床面No.2
	104	弥生時代中期	弥生土器	甕	底部	2/3	ハケ	A	2	SB4	床面No.4
	105	弥生時代中期	弥生土器	甕	口縁～胴部	1/4	頸：櫛描、胴：羽状文	A	2	SK4	覆土No.3
	106	弥生時代中期	弥生土器	甕	口縁～胴部	1/4	頸：櫛描、胴：羽状文	A	2	SK4	覆土No.2
	107	弥生時代中期	弥生土器	甕	口縁～胴部	1/4	口縁：刺突、櫛描横文	A	2	SK4	覆土No.2
	108	弥生時代中期	弥生土器	壺	底部	1	ハケ・ミガキ	A	2	SK4	覆土No.2
	109	弥生時代中期	弥生土器	壺	底部	2/3	ミガキ?	A	2	SK4	覆土No.3
110	弥生時代中期	弥生土器	甕	頸部～底部	1/3	縦羽状文、刺突	A	2	SK4	覆土No.2	
111	弥生時代中期	弥生土器	甕	胴部～底部	2/3	胴部：刺突	A	2	SK4	覆土No.2	
112	弥生時代中期	弥生土器	甕	口縁～胴部	1/4	口縁：縄文、胴部：櫛描 文様+波状文	A	2	SK4	覆土No.3	
113	弥生時代中期	弥生土器	甕	全形	2/3	穿孔1、器形大きく歪む	A	2	SK4	覆土No.2	
114	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～胴部	1/2	縄文-ヘラ横線・刺突 胴部：横線・山形文	A	2	SK4	覆土No.1	
115	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～胴部	1/2	口縁：縄文、胴：横沈線	A	2	SK4	覆土No.1	
116	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～頸部	1/4	口：刺突、胴：縄文・沈線	A	2	SK4	覆土No.2	
117	弥生時代中期	弥生土器	壺	胴部～底部	3/4	ハケ・ミガキ	A	2	SK4	覆土No.3	
118	弥生時代中期	弥生土器	壺	胴部～底部	2/3	横沈線-連弧文	A	2	SK4	覆土No.2	
119	弥生時代中期	弥生土器	壺	胴部～底部	1/3	ミガキ	A	2	SK4	覆土No.2	
120	弥生時代中期	弥生土器	蓋	つまみ	1	ナデ	A	2	SB8	覆土～床	
121	弥生時代中期	弥生土器	甕	口縁～胴部	1/5	簾状文・櫛描-縦線文	A	2	SB8	覆土～床	
122	弥生時代中期	弥生土器	鉢	口縁～胴部	1/3	連弧文、線上に刺突2	A	2	SB7	覆土～床	
123	弥生時代中期	弥生土器	甕	底部	1/3	ミガキ	A	2	SB7	ピット覆土	
124	弥生時代中期	弥生土器	甕	口縁～胴部	1/5	口縁：波状、横羽状文+ 刺突文	A	2	SB7	ピット覆土	
125	弥生時代中期	弥生土器	壺	胴部～底部	3/4	横沈線文	A	2	グリッド		
126	弥生時代中期	弥生土器	甕	底部	1/2	ミガキ	A	2	SD1	覆土	

2 硯 (図34)

円面硯。破片3片のみで、残存部分は脚部である。大きさは複元で底径が約18cmと推定される。文様は、脚部部から1.4cmほど上の部分に横沈線が一周めぐり、横沈線の直上に十文字の透かしと脚部全体に数カ所あると考えられる透かしの間に長さ3cmほどの縦方向の先刻が数本入っている。

奈良時代住居 (A区1次層SB4) の覆土中からの出土であることから、遺構に確実に伴うものとは判断できないが、同じ位置からの出土土器は、およそ8世紀後半から8世紀末の時期のものである。

また、同じ位置からは双耳杯が出土しているが、これについても遺構からのものかの判断はつかないが、出土位置からは同時期であること、8世紀後半～末頃から住居が展開している9世紀初頭までのものであることが考えられる。

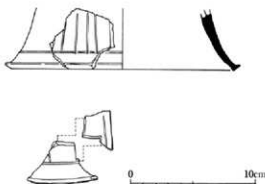


図34 硯実測図 (1:3)

3 石器 (図35)

長さ7.6cm・幅4.1cm、厚さ最大1.5cm、変質輝緑岩製の扁平片刃石斧である。

A区2次層SB4の床面からの出土で、一部使用によるものとみられる欠損部分があるが、ほぼ完形である。

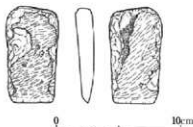


図35 石器実測図 (1:3)

4 土製品 (図36)

1 土鍾：長さ2.9cm、最大径1.5cmの筒状。表面は指ナデによって成形され、両端は薄くなっていることから、棒状のものに付けて作られたものである。ほぼ元の大きさであるとみられる。

2 用途不明：底面2.8cmの楕円形で断面は台形に近い三角形である。側面に一カ所、上部から底部かけて斜めに穿孔がある (焼成前)。穿孔のある側は一部欠損しているが本来は左右対称であるとみられ、底部にはモミとみられる痕がある。

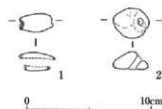


図36 土製品実測図 (1:3)

表3 硯・石器・土製品観察表

図版 番号	時期	種別	器種	残存量	重量 (g)	調整・その他	出土遺構		
							区	面	位置
34	1	平安時代	硯	円面硯	1/10	脚部：十字透かし・縦線刻	A	1	SB4 覆土
35	1	弥生時代中期	石器	扁平片刃石斧	完形	76.55	変質輝緑岩、一部磨耗	A	2 SB4 床面
36	1	奈良・平安時代	土製品	土鍾	完形	4.84	筒状	A	1 SB6 覆土
	2	弥生時代中期	土製品	用途不明	完形	6.46	焼成前穿孔1	A	2 SB8 覆土

IV 自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

<目次>

はじめに

I 試料

II 放射性炭素年代測定

III 樹種同定

IV 微細物(微細植物片)分析

引用文献

<図表・図版一覧>

表1 分析試料一覧

図版1 試料状況(柱穴埋土 炭化材)

表2 放射性炭素年代測定および暦年校正結果

図版2 試料状況(柱穴埋土 炭化材)

表3 樹種同定結果

図版3 試料状況(壺・甕形土器内土壌)

表4 微細物(微細植物片)分析結果

図版4 試料状況(壺・甕形土器内土壌、半裁状況)

表5 主な炭化種実の計測値

図版5 炭化材

図1 暦年校正結果

図版6 炭化種実

はじめに

県町遺跡(長野県長野市大字南長野地内)は、現在の裾花川の左岸、裾花川が形成した扇状地上に位置する。中村ほか(1974)などを参考とすると、裾花川扇状地扇頂付近には数段の段丘の存在が指摘されており、本遺跡は旧扇状地面に相当する段丘面上に立地する。本遺跡の発掘調査では、弥生時代中期、奈良・平安時代の集落であることが明らかとされている。このうち、奈良・平安時代の遺構は、2面の検出面より確認されており、集落の存続期間が長かったことが指摘されている。また、弥生時代中期の住居跡では、東隅より土器10個体(壺形9個、甕形1個)がまとめて出土する状況が確認されている。

本報告では、上記した弥生時代中期の住居跡(A区2次面SB4)の年代や、同住居跡の東隅よりまとめて出土した壺・甕形土器の内容物の検討を目的として、自然科学分析調査を実施した。

I 試料

1. 概要

試料は、弥生時代中期の住居跡(A区2次面SB4)の床面から検出された柱穴の埋土より採取された炭化材試料5点と柱穴の埋土より採取された土壌9点、および同住居跡より出土した壺・甕形土器を充填する堆積物より採取された土壌11点からなる(表1)。

2-1. 柱穴試料

(1) 炭化材試料(図版1-1~5)

試料は、柱No2、柱No3、柱No4、柱No6および柱No7の5点からなる。試料の状態は、試料によって異っており、柱No2、4は炭化材を主体として比較的大型の破片が認められ、柱No7も比較的大型の炭化材片を含む

泥からなる。一方、柱No 3, 6は微量～極微量の炭化物が混じる泥からなる。

(2) 土壌試料 (図版1-6～8、図版2-9～14)

試料は、7本の柱穴(柱No 1～No 7)の埋積物(埋土)より採取された土壌であり、柱No 1, 2は覆土上部・下部から採取されていることから、計9点からなる。柱穴埋土は泥～シルトからなる細粒堆積物を主体とし、炭化物の含有状況は上記の炭化材試料と同様に遺構によって異なる。炭化材は、柱No 2、同No 2(下)と柱No 4で多く認められ、その他では炭化材が少量～微量確認されたのみである。また、柱No 3には焼骨片も確認された。

表1. 分析試料一覧

調査区遺構名	出土状況	名称	種別	観察所見
A区2次面SB4	柱穴埋土	柱材No 2	炭化材	炭化材主体(大形破片を含む)。
A区2次面SB4	柱穴埋土	柱材No 3	炭化材	炭化物が微量混じる灰黄色～灰黄色泥。炭化物状態悪い
A区2次面SB4	柱穴埋土	柱材No 4	炭化材	炭化材主体(大形破片を含む)。
A区2次面SB4	柱穴埋土	柱材No 6	炭化材	炭化物微量混じる暗灰色～暗褐色泥。炭化物状態悪い。
A区2次面SB4	柱穴埋土	柱材No 7	炭化材	炭化材が混じる灰褐色(大形破片を含む)。
A区2次面SB4	柱穴埋土	柱材No 1	土壌	炭化材片が少量～微量混じる。
A区2次面SB4	柱穴埋土	柱材No 1(下)	土壌	炭化材片が少量～微量混じる。
A区2次面SB4	柱穴埋土	柱材No 2	土壌	炭化材片が多量混じる。
A区2次面SB4	柱穴埋土	柱材No 2(下)	土壌	炭化材片が多量混じる。
A区2次面SB4	柱穴埋土	柱材No 3	土壌	炭化材片が微量混じるほか、焼骨片の細片も認められる。
A区2次面SB4	柱穴埋土	柱材No 4	土壌	炭化材片が多量混じる。
A区2次面SB4	柱穴埋土	柱材No 5	土壌	炭化材片が少量～微量混じる。
A区2次面SB4	柱穴埋土	柱材No 6	土壌	炭化材片が少量～微量混じる。
A区2次面SB4	柱穴埋土	柱材No 7	土壌	炭化材片が少量混じる。
A区2次面SB4	床面直上	壺No 1(1/2)	土器内土壌	不攪乱試料含む(頸部?)
A区2次面SB4	床面直上	壺No 1(2/2)	土器内土壌	塊状を呈する不攪乱試料(胴部～底部?)
A区2次面SB4	床面直上	壺No 2	土器内土壌	塊状を呈する不攪乱試料(胴部～底部?)
A区2次面SB4	床面直上	壺No 3	土器内土壌	塊状を呈する不攪乱試料
A区2次面SB4	床面直上	壺No 4	土器内土壌	塊状を呈する不攪乱試料(頸部～底部?)
A区2次面SB4	床面直上	壺No 5	土器内土壌	塊状を呈する不攪乱試料(胴部～底部?)
A区2次面SB4	床面直上	壺No 6	土器内土壌	塊状を呈する不攪乱試料(胴部～底部?)
A区2次面SB4	床面直上	壺No 7	土器内土壌	
A区2次面SB4	床面直上	壺No 8	土器内土壌	
A区2次面SB4	床面直上	壺No 9	土器内土壌	
A区2次面SB4	床面直上	壺No 10	土器内土壌	

2-2. 壺・甕形土器試料 (図版3-1～8、図版4-9～17)

試料は、壺・甕形土器内に充填する堆積物より採取された土壌である。土壌試料は、塊状を為す不攪乱試料(図版3-2～7)と攪乱試料(図版3-1、図版3-8～11)からなり、前者は壺No 1下(2/2)～6、後者は壺No 1上(1/2)、壺No 7～8・10、甕No 9に相当し、壺No 1上(1/2)には頸部付近に相当すると考えられる不攪乱試料が認められる。

土壌試料は、調査所見や試料の観察所見を参考とすると、正位および傾位の状態で出土した壺・甕形土器の内面下部に埋積した堆積物に相当する。これらの試料のうち、不攪乱試料(壺No 1下～6)を半裁し、堆積物の観察を行った結果、各試料を通じて概ね共通する特徴が認められた(図版4-12～17)。壺No 1下～6の堆積物は、下部は孔隙が発達する灰黄色～灰褐色を呈する泥からなり、微細な炭化物が混じる。壺No 4では焼土様の褐色泥の微小ブロックが混じる。上部は、(青)灰色～灰黄色を呈する(平行)葉理構造を有する泥からなる。上部の泥層

より上位には細粒～極細粒砂が認められるほか、壺No 6では灰色泥や黒色泥の微小ブロックが混じる暗灰色泥も認められる。以上の状況から、下部の灰黄色～灰褐色泥は壺形土器設置時の人為による堆積物および設置後に埋積した堆積物の可能性があり、上部の堆積物はその後の河川の氾濫などによる泥や砂に由来すると考えられる。

II 放射性炭素年代測定

1. 試料

試料は、A区2次面SB4の柱穴試料より抽出した炭化材4点である。測定には、試料の状態や観察所見（1章）および担当者との協議により、柱No 2（炭化材試料）、柱No 4（炭化材試料）、柱No 6（土壌試料）および柱No 7（炭化材試料）を対象としている。

測定に供した試料は、柱No 2が分割材（板目）状を呈する炭化材片（1 cm × 3 cm × 3 cm、8年輪程度）、柱No 4が分割材（板目）状を呈する炭化材片（1.5 cm × 2.5 cm × 2.5 cm、8年輪程度）、柱No 6が1 cm角程度の炭化材片、柱No 7が分割材（板目）状を呈する炭化材片（2 cm × 2 cm × 3 cm、10年輪程度）であり、柱No 2、4、7については、残存する最外年輪の数年輪分を供している。

2. 分析方法

測定試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後、HClによる炭酸塩等酸可溶性成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶性成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶性成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。次に、試料をバイコール管に入れ、1 gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じり、500°C（30分）850°C（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1 mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定と同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて δ^{13} Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma: 68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver and Polach, 1977）。なお、本報告では、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算に対応できるよう、1年単位の値も記した。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730 ± 40年）を較正することである。本報告では、暦年較正には、OxCal4.2較正プログラム（Bronk & Lee, 2013）を用い、較正曲線はIntcal 13（Reimer *et al.*, 2013）を用いている。また、暦年較正結果は1σ・2σ（1σは統計的に真の値が68.2%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95.4%の確率で存在する範囲）の値を示す。

3. 結果および考察

A区2次面SB4の柱穴より出土した炭化材の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、柱No

2の炭化材が $2,060 \pm 20$ BP、柱No 4の炭化材が $2,090 \pm 20$ BP、柱No 6の炭化材が $2,020 \pm 20$ BP、柱No 7の炭化材が $2,070 \pm 20$ BPを示す。また、暦年較正結果(2 σ)は、柱No 2が calBC164-calAD 3、柱No 4が calBC183-calBC 47、柱No 6が calBC89-calAD54、柱No 7が calBC172-calBC 5である(表2、図1)。

表2. 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料	補正年代 (BP)	813C (‰)	補正年代 (暦年較正用) (BP)	暦年較正結果		測定機関 CodeNo.
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
A区2次面 SB4柱穴埋土 柱材No 2 炭化材	$2,060 \pm 20$	-28.60 ± 0.46	$2,056 \pm 24$	111BC (65.0%) 38BC 9BC (3.2%) 3BC	164BC (12.4%) 129BC 121BC (83.0%) 3AD	IAAA- 160536
A区2次面 SB4柱穴埋土 柱材No 4 炭化材	$2,090 \pm 20$	-31.59 ± 0.43	$2,094 \pm 24$	164BC (59.8%) 91BC 71BC (8.4%) 60BC	183BC (95.4%) 47BC	IAAA- 160537
A区2次面 SB4柱穴埋土 柱材No 6 炭化材	$2,020 \pm 20$	-26.78 ± 0.46	$2,016 \pm 24$	44BC (68.2%) 16AD	89BC (2.5%) 76BC 56BC (92.9%) 54AD	IAAA- 160538
A区2次面 SB4柱穴埋土 柱材No 7 炭化材	$2,070 \pm 20$	-29.96 ± 0.35	$2,073 \pm 24$	152BC (8.9%) 139BC 113BC (59.3%) 48BC	172BC (95.0%) 39BC 8BC (0.4%) 5BC	IAAA- 160539

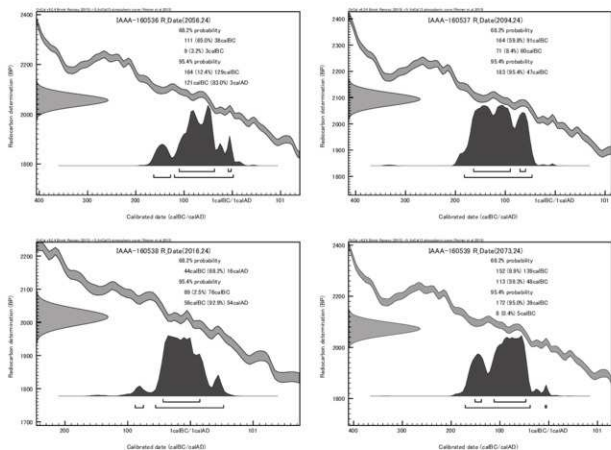


図1. 暦年較正結果

以上の結果を参考とすると、A区2次面SB4は紀元前2世紀から1世紀までの暦年代範囲が推定される。また、本地域における土器福年や実年代に関する資料（小林, 2009, 寺島, 2013, 馬場, 2015）などを参考とすると、弥生時代中期後半の栗林式期の遺構の可能性もある。なお、測定に供した炭化材は、本来の形状の復元が困難な破片であり、いずれも樹皮や最外年輪を欠く試料であった。そのため、得られた年代の評価にあたっては、古木効果の影響を考慮する必要がある。

Ⅲ 樹種同定

1. 試料

試料は、A区2次面SB4から検出された柱穴（柱No.1～7）埋土の炭化材試料および土壌試料より抽出した炭化材10点である。このうち、柱No.2, 4, 6, 7の4点は、Ⅱ章の放射性炭素年代測定試料の履歴（種類）の確認を目的として、測定に供した炭化材より分割した破片を分析対象としている。その他の試料については、SB4の柱材の樹種および木材利用に関わる資料の作成を目的として、各試料に認められた比較的大型の破片を分析対象としている。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995-1999）を参考にする。

3. 結果

同定結果を表3に示す。炭化材は、広葉樹3分類群（コナラ属コナラ亜属クスギ節、コナラ属コナラ亜属コナラ節、エノキ属）に同定された。なお、柱No.6は、道管を持つ広葉樹の細片が固結した状態であった。観察された特徴は、エノキ属に似るが、断定できないことから広葉樹とした。以下に、同定された各分類群の解剖学的特徴を記す。

表3. 樹種同定結果

遺構・地点	名称	種別	番番号	形状	種類 (分類群)	備考
A区2次面 SB4 柱穴埋土	柱No.1	土壌		破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節	
	柱No.2	炭化材		分割材（板目）状	エノキ属	放射性炭素年代測定試料
	柱No.3	炭化材		破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	柱No.4	炭化材	1	分割材（板目）状	エノキ属	放射性炭素年代測定試料
			2	分割材（板目）状	エノキ属	
			3	分割材（柀目）状	エノキ属	
	柱No.5	土壌		破片	エノキ属	
	柱No.6	土壌		破片	広葉樹	放射性炭素年代測定試料
柱No.7	炭化材	1	分割材（板目）状	エノキ属	放射性炭素年代測定試料	
		2	分割材（板目）状	エノキ属		

・コナラ属コナラ垂属クスギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものとの複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ垂属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

試料は微細片で電子顕微鏡による観察と写真撮影ができなかった。実体顕微鏡で観察された特徴は、環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。放射組織は単列のものとの大型の複合放射組織とが認められる。

・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合し接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で精細胞が認められる。

4. 考察

A区2次面SB4の柱穴埋土(柱No1~7)より抽出した炭化材の樹種同定の結果、広葉樹のコナラ属コナラ垂属クスギ節、コナラ属コナラ垂属コナラ節、エノキ属が認められた。クスギ節とコナラ節は二次林の主要構成種となる落葉高木であり、クスギ節の方がより湿った環境に生育し、木材はいずれも重硬で強度が高い。また、エノキ属は河畔などに生育する落葉高木であり、木材はやや重硬な部類に入る。

今回の分析結果から、柱材などの建築部材にはエノキ属を主体として3種類の木材の利用が示唆される。また、確認された樹種の材質の特徴から比較的強度の高い木材が選択的に利用されていたことが推定される。

なお、本遺跡周辺における調査事例では、県町遺跡のGOA(後町小学校)地点の弥生時代中期の堅穴住居跡より出土した炭化材の分析が行われており、エノキ属が多く確認されている(未公表試料)。現段階では県町遺跡の2地点の調査事例のみに限られるが、いずれもエノキ属を主体とする傾向を示すことから、建築部材はエノキ属を主体とする木材利用であった可能性がある。

IV 微細物(微細植物片)分析

1. 試料

試料は、A区2次面SB4の東隣の床面直上から出土した壺・甕形土器(壺No1~8・10、甕No9)内を充填する堆積物より採取された土壌11点がある(表1)。

これらの土壌試料のうち、不攪乱試料(壺No1~6)の観察の結果、由来(履歴)の異なると考えられる堆積物の埋積が確認されている。本分析では壺形土器の内容物の検討を目的としたことから、前述した観察所見に基づき担当者と協議を行い、壺形土器の設置から氾濫堆積物に由来すると考えられる(青)灰色~灰黄色泥が埋積する間の堆積物に相当する、灰黄色~灰褐色泥を分析対象としている。また、壺No7~8・10、甕No9については、不攪乱試料(壺No1~6)の観察所見を参考とし、肉眼観察で確認される(青)灰色~灰黄色泥を可能な限り除去した残りの土壌を分析対象としている。

2. 分析方法

試料を計量した後、肉眼観察で確認された炭化物や土器片などの遺物を抽出する。抽出後の試料を水を満たし

た容器内に投入し、速やかに容器を傾けて、水に浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（20回程度）。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。

水洗後、水に浮いた試料（炭化材主体）と水に沈んだ試料（砂礫主体）を、粒径別に常温乾燥させる。乾燥後、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定可能な炭化種実や炭化材（主に2mm以上）、骨片、土器片等の遺物を抽出する。

炭化種実の同定は、現生標本や椿坂（1993）、石川（1994）、小畑（2008・2011）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2012）等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。また、保存状態が良好な栽培種等の一部の炭化種実を対象として、デジタルノギスで長さ、幅、厚さ等を計測した結果を一覧表で示す。炭化材は重量と最大径、骨片は個数と重量、最大径を表示する。分析残渣は、炭化材主体、砂礫主体に大まかに分け、粒径別重量を表示する。分析後は、抽出物と分析残渣を容器に入れて保管する。

3. 結果

結果を表4に示す。また、炭化種実各分類群の写真を図版6に示し、イネとマメ科（ダイズ類？）の計測値を表5に示して同定根拠とする。

壺No1～8・10、壺No9の充填堆植物（下部：17.635cc（30.752g））の水洗選別の結果、炭化種実8分類群（オニグルミ、イネ、アワ、イネ科、サナエタデ近似種、タデ属、マメ科（野生種、ダイズ類？））93個、不明炭化物0.3g、炭化材18.6g、骨片19個0.02g、土器片218個255.9gが検出された。分析残渣は、炭化材主体が8.8g、砂礫主体（土器片含む）が153.3g、炭化していない植物片（草本のアカザ属種子5個含む）が0.07gを量る。なお、炭化していない植物片は、後代の混入の可能性が高いため、解析より除外している。

炭化種実は、壺No5,8を除く8試料より確認され、落葉広葉樹のオニグルミの核が1個と、草本のイネの穎（基部）が22個、穎が4個、胚乳が17個、アワの胚乳が1個、イネ科の穎・胚乳が5個、サナエタデ近似種の果実が22個、タデ属の果実が2個、マメ科（野生種）の種子が3個、マメ科（ダイズ類？）の種子が13個、マメ科（ダイズ類？）の種子が3個同定された。栽培種は、イネが壺No5,8を除く8試料より43個と、アワが壺No7より1個の、計44個が確認された。その他、栽培の可能性のあるマメ科（ダイズ類？）が壺No1,3,6,7,10より13個と、マメ科（ダイズ類？）が壺No9より3個の、計16個が確認された。これらの栽培種と栽培の可能性を含む炭化種実は、出土炭化種実全体の65%（計60個）を占める。以下に、試料別の出土状況を述べる。

(1) 壺No1（2/2）

試料3.350cc（5.601g）より、炭化種実5分類群（イネ、イネ科、サナエタデ近似種、マメ科（野生種、ダイズ類？））12個、不明炭化物0.01g、炭化材1.5g（最大1.5cm）、土器片24個36.9g（最大4.0cm）が検出された。分析残渣は、炭化材主体が1.2g、砂礫主体（土器片含む）が11.2g、炭化していない植物片（アカザ属種子2個含む）が0.02gを量る。

栽培種は、イネの穎（基部）が5個、胚乳が2個確認され、うち完形胚乳1個の「粒大（長さ×幅）、粒形（長さ／幅）」は、(佐藤, 1988)は、短粒・極小型に該当する。栽培の可能性のある分類群は、マメ科（ダイズ類？）の種子が1個確認された。

(2) 壺No2

試料2.750cc（4.769g）より、炭化種実4分類群（イネ、イネ科、サナエタデ近似種、タデ属）28個、不明炭化物0.1g、炭化材0.5g（最大1.1cm）、土器片5個6.0g（最大4.1cm）が検出された。分析残渣は、炭化材主体

IV 自然科学分析

表4. 微細物（微細植物片）分析結果

分類群・部位	状態・粒径	A区2次面SB4床面直上										備考			
		密No1 (2/2)	密No2	密No3	密No4	密No5	密No6	密No7	密No8	密No9	密No10				
炭化種実															
オニグルミ	核	破片	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	個数 0.013g, 6.3mm
イネ	穎(基部)	破片	5	4	3	3	-	2	1	-	3	1	1	1	個数
	穎	破片	-	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	個数
	胚乳	完形	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2個数
		完形未満	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	5	1	5個数
アワ	胚乳	破片	1	2	-	-	-	-	1	-	1	1	1	1	1個数
		穎・胚乳	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1個数
イネ科	穎・胚乳	完形	2	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1個数
		破片	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1個数
サナエタデ近似種	果実	完形	-	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1個数
		破片	1	13	1	-	-	2	1	-	-	-	-	-	1個数
タデ属	果実	破片	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1個数, 3面体, 粗面
		破片	1	13	1	-	-	2	1	-	-	-	-	-	1個数
マメ科(野生種)	種子	完形	1	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1個数
マメ科(グイズ類?)	種子	完形	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1個数
マメ科(グイズ類?)	種子	完形未満	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1個数
		破片	1	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	7個数
マメ科(グイズ類?)	種子	完形未満	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1個数, 状態不良
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1個数, 状態不良
不明炭化物			0.01	0.05	0.03	0.01	0.00	0.04	0.08	0.04	0.04	0.03	0.03	0.03	乾重 (g)
炭化材	> 2mm		15.3	10.8	25.0	10.9	11.3	9.1	5.5	28.8	14.6	16.7	16.7	16.7	最大径(mm), 密No1本(1種)が多い
			1.46	0.45	8.80	0.51	1.35	0.16	0.06	2.48	0.96	2.34	2.34	2.34	乾重 (g)
骨片			-	-	0.02	-	-	0.00	-	-	-	-	-	-	乾重 (g)
			-	-	17	-	-	2	-	-	-	-	-	-	個数
			-	-	6.1	-	-	2.3	-	-	-	-	-	-	最大径 (mm)
炭化材主体	2 - 1mm		0.26	0.11	0.50	0.28	0.10	0.13	0.08	0.52	0.75	0.65	0.65	0.65	乾重 (g)
	1 - 0.5mm		0.96	0.35	0.54	0.84	0.18	0.47	0.14	0.67	0.72	0.53	0.53	0.53	乾重 (g)
砂礫主体	> 4mm		1.04	0.50	-	81.79	0.05	0.21	5.17	1.38	2.09	1.62	1.62	1.62	乾重 (g), 土器片含む
	4 - 2mm		1.51	0.55	1.11	2.01	1.31	0.22	3.40	0.76	2.08	0.61	0.61	0.61	乾重 (g)
	2 - 1mm		1.37	1.27	0.73	1.54	0.84	0.157	2.96	1.66	1.86	1.01	1.01	1.01	乾重 (g)
	1 - 0.5mm		7.23	3.69	2.03	4.13	2.23	1.27	5.42	2.23	3.05	1.25	1.25	1.25	乾重 (g)
土器片			36.92	6.04	26.46	22.12	2.72	21.68	31.86	26.21	50.87	31.02	31.02	31.02	乾重 (g)
			24	5	10	32	9	7	69	19	34	9	9	9	個数
			39.8	41.0	43.7	24.7	20.1	41.5	30.4	41.7	37.8	43.8	43.8	43.8	最大径 (mm)
非炭化植物片	> 2mm		0.02	0.02	0.02	0.00	-	-	0.01	-	-	-	-	-	混入の可能性
非炭化種実															混入の可能性
アカザ属	種子	破片	2	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1個数
分析量			3350	2750	1660	1350	1075	1050	2400	800	2000	1200	1200	1200	容積 (cc)
			5601	4769	2843	2405	1877	1827	4303	1411	3502	2164	2164	2164	湿重 (g)

表5. 主な炭化種実の計測値

分類群・部位	地点	図取番号	計測値 (mm)			粒大・粒形*1			簡易植門体積*2		備考
			長さ	幅	厚さ	粒大	範囲	粒形	範囲	(ml)	
イネ胚乳	密No1	2	4.62	2.43	2.01	11.2	極小	1.9	短粒	-	
イネ胚乳	密No2	3	3.13	1.08	0.84	3.4	極々小	2.9	長粒	-	
イネ胚乳	密No10	4	4.00	2.02	1.96	8.1	極小	2.0	短粒	-	
イネ胚乳	密No10	5	2.31	1.12	0.82	2.6	極々小	2.1	長粒	-	刷り切れ
マメ科(グイズ類?) 種子	密No6	17	3.17	2.51	1.79	-	-	-	7.45	野生型	焼き膨れ、背面突出、 幼根長1.6、鱗長1.4 mm、鱗幅0.8mm
マメ科(グイズ類?) 種子	密No6	18	3.45	2.64	2.10	-	-	-	10.01	野生型	幼根長1.5mm、鱗長 1.3mm (不明瞭)
マメ科(グイズ類?) 種子	密No10	19	3.09+	2.34	1.80	-	-	-	>6.81	野生型	一端欠損、顕明瞭

[注] 計測はデジタルノギスを使用し、欠損は残存値に「+」で示す。

*1: 佐藤 (1988) の定義に従う。

*2: 那須ほか (2015) の定義に従う。

が0.5g、砂礫主体（土器片含む）が6.0g、炭化していない植物片（アカザ属種子1個含む）が0.02gを量る。

栽培種は、イネの類（基部）が4個、穎が2個、胚乳が3個確認され、このうち完形胚乳1個は、長粒・極々小型（佐藤、1988）に該当する。

(3) 壺No 3

試料1.660cc (2.843g) より、炭化種実4分類群（イネ、サナエタデ近似種、マメ科（野生種、ダイズ類?））9個、不明炭化物0.03g、炭化材8.8g（最大2.5cm）、骨片17個0.02g（最大0.6cm）、土器片10個26.5g（最大4.4cm）が検出された。分析残渣は、炭化材主体が1.0g、砂礫主体（土器片含む）が3.9g、炭化していない植物片（アカザ属種子1個含む）が0.02gを量る。

栽培種は、イネの類（基部）が3個、穎が1個、胚乳が1個確認された。栽培の可能性がある分類群は、マメ科（ダイズ類?）の種子が1個確認された。

(4) 壺No 4

試料1.350cc (2.405g) より、炭化種実2分類群（オニグルミ、イネ）5個、不明炭化物0.01g、炭化材0.5g（最大1.1cm）、土器片32個22.1g（最大2.5cm）が検出された。分析残渣は、炭化材主体が1.1g、砂礫主体（土器片含む）が89.5g、炭化していない植物片が0.00gを量る。

栽培種は、イネの類（基部）が3個、穎が1個確認された。

(5) 壺No 5

試料1.075cc (1.877g) より、不明炭化物0.00g、炭化材1.4g（最大1.1cm）、土器片9個2.7g（最大2.0cm）が検出された。分析残渣は、炭化材主体が0.3g、砂礫主体（土器片含む）が4.4gを量る。

(6) 壺No 6

試料1.050cc (1.827g) より、炭化種実5分類群（イネ、イネ科、サナエタデ近似種、マメ科（野生種、ダイズ類?））8個、不明炭化物0.04g、炭化材0.2g（最大0.9cm）、骨片2個0.00g（最大2.3mm）、土器片7個21.7g（最大4.2cm）が検出された。分析残渣は、炭化材主体が0.2g、砂礫主体（土器片含む）が1.9gを量る。

栽培種は、イネの類（基部）が2個確認された。栽培の可能性がある分類群は、マメ科（ダイズ類?）の種子が2個確認され、「簡易楕円体積（長さ/2×幅/2×厚さ/2×4/3×π）」（那須ほか、2015）は、2個とも「40mm以下の野生型」に該当する。

(7) 壺No 7

試料2.400cc (4.303g) より、炭化種実5分類群（イネ、アワ、イネ科、サナエタデ近似種、マメ科（ダイズ類?））6個、不明炭化物0.1g、炭化材0.1g（最大0.6cm）、土器片69個31.9g（最大3.0cm）が検出された。分析残渣は、炭化材主体が0.2g、砂礫主体（土器片含む）が16.9g、炭化していない植物片が0.00gを量る。

栽培種は、イネの類（基部）が1個、胚乳が1個、アワの胚乳が1個確認された。栽培の可能性がある分類群は、マメ科（ダイズ類?）の種子が1個確認された。

(8) 壺No 8

試料800cc (1.411g) より、不明炭化物0.04g、炭化材2.5g（最大2.9cm）、土器片19個26.2g（最大4.2cm）が検出された。分析残渣は、炭化材主体が1.2g、砂礫主体（土器片含む）が6.0gを量る。

(9) 壺No 9

試料2.000cc (3.552g) より、炭化種実2分類群（イネ、マメ科（ダイズ類?））8個、不明炭化物0.04g、炭化材1.0g（最大1.5cm）、土器片34個50.9g（最大3.8cm）が検出された。分析残渣は、炭化材主体が1.5g、砂礫主体（土器片含む）が9.1gを量る。

栽培種は、イネの類（基部）が3個、胚乳が2個確認された。栽培の可能性がある分類群は、マメ科（ダイズ類？）の種子が3個確認された。

(10) 壺No10

試料1.200cc (2.164g) より、炭化種実2分類群（イネ、マメ科（ダイズ類？））17個、不明炭化物0.03g、炭化材2.3g（最大1.7cm）、土器片9個31.0g（最大4.4cm）が検出された。分析残渣は、炭化材主体が1.2g、砂礫主体（土器片含む）が4.5gを量る。

栽培種は、イネの類（基部）が1個、胚乳が8個確認され、うち完形胚乳2個は、短粒・極小型と長粒・極々小型（佐藤, 1988）に該当する。長粒・極々小型の胚乳は、短軸方向の裂開（割切れ）が確認される。栽培の可能性は、マメ科（ダイズ類？）の種子が8個確認され、このうち完形1個は「40mm以下の野生型」（那須ほか, 2015）に該当する。

4. 考察

A区2次面SB4の東隅より出土した壺形土器の充填堆積物の水洗選別の結果、炭化種実、炭化材、骨片、土器片などの（微細）遺物が検出された。炭化種実や炭化材、骨片などの出土状況は、単位容量あるいは単位重量あたりの個数や重量が極少量、あるいは未検出という状況であった。今回の分析結果では、特定の微細遺物の多量検出などの特異な産状が確認できないことから、壺・甕形土器設置時における貯蔵や埋納などの明瞭な痕跡を見出すには至らなかった。

なお、検出された微細遺物のうち、炭化種実は栽培種のイネを主体し、アワの他に、栽培の可能性のあるマメ科（ダイズ類？）、木本のオニグルミ、草本のイネ科、サナエタデ近似種、タデ属、マメ科（野生種）が確認された。穀類のイネやアワは、当時利用された植物質食糧と考えられる。イネは、壺No5, 8を除く8試料より類と胚乳が検出され、佐藤（1988）の定義による短粒・極小型（壺No1, 10）と長粒・極々小型（壺No2, 10）に該当する胚乳（炭化米）が確認された。また、アワは壺No7より1個確認されたのみであるが、県町遺跡GOA地点ではA区SB4炭化材上から出土した小型壺内部より多量確認されている（未公表資料）。

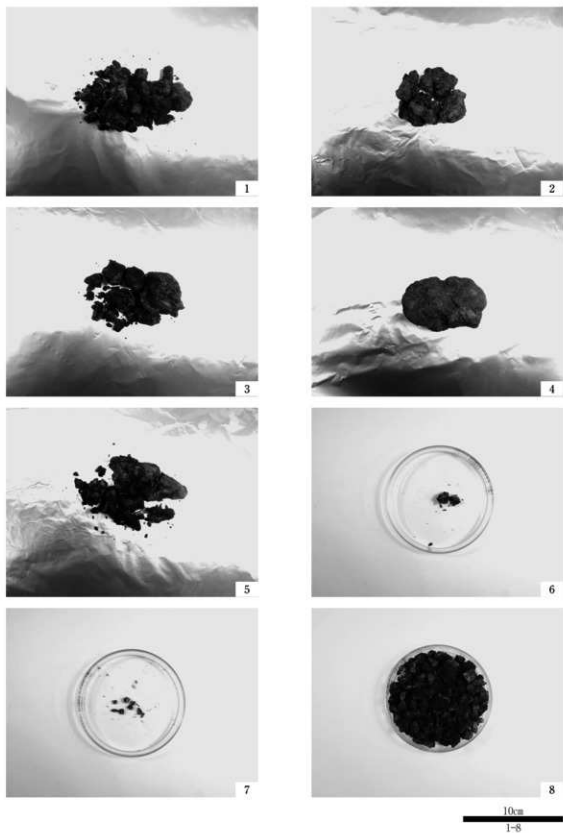
壺No1, 3, 6, 7, 10, 甕No9より確認されたマメ科（ダイズ類？）は、近年の研究から縄文時代以降の栽培やサイズの大形化が検討されている（那須ほか, 2015など）。壺No6, 10より出土した種子のサイズ範囲は「野生型」（那須ほか, 2015など）に該当し、現生の野生種のツルマメ（*Glycine max* subsp. *soja* Sieb. et (Zucc.) Ohashi）に類似する小さいサイズである。今回の出土種子については、栽培の可能性やサイズの大形化を支持するには至らないが、イネやアワと共存する状況から植物質食料として利用された可能性がある。

一方、栽培種と栽培の可能性を除いた炭化種実群は、木本のオニグルミと、草本のイネ科、サナエタデ近似種、タデ属、マメ科が確認された。壺No4より1個確認されたオニグルミは、高木になる河畔林要素の落葉広葉樹であり、核内部の子葉があく抜きせずに食用可能である。また、長期保存可能で収量も多いことから、古くから利用されてきた有用植物である。イネ科、サナエタデ近似種、タデ属、マメ科は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群であることから、調査地周辺の草地環境に由来すると考えられる。

<引用文献>

- Bronk Ramsey, C. & Lee, S. 2013, Recent and Planned Developments of the Program OxCal. Radiocarbon, 55, 720-730.
 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.

- 中村 三郎・小林 詢, 1974, 地形各論 長野5万分の1, 土地分類基本調査簿(国土調査), 第157号, 経済企画庁, 1-22.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 小林謙一, 2009, 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編 縄文時代から弥生時代へ, 新弥生時代のはじまり, 第4巻, 雄山閣, 55-82.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑(2010年改訂版), 東北大学出版会, 678p.
- 那須浩郎・会田 進・佐々木由香・中沢道彦・山田武文・奥石 甫, 2015, 炭化種実資料からみた長野県諏訪地域における縄文時代中期のマメの利用, 資源環境と人類, 第5号, 明治大学黒曜石研究センター, 37-52.
- 小畑弘巳, 2008, マメ科種子同定法, 「極東先史古代の雑穀3」, 日本学術振興会平成16-19年度科学研究費補助金(基盤B-2)(課題番号16320110)「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」研究成果報告書, 小畑弘巳編, 熊本大学埋蔵文化財調査室, 225-252.
- 小畑弘巳, 2011, 東北アジア古民族植物学と縄文農耕, 同成社, 309p.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Haffnason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J., 2013, IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP, Radiocarbon, 55, 1869-1887.
- Stuiver Minze and Polach A Henry, 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data, Radiocarbon, 19, 355-363.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延高文, 2012, ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種—, 誠文堂新光社, 272p.
- 椿坂恭代, 1993, アワ・ヒエ・キビの同定, 吉崎昌一先生還暦記念論集「先史学と関連科学」, 261-281.
- 佐藤敏也, 1988, 弥生のイネ, 弥生文化の研究2生業, 金岡 怨・佐原 真編, 雄山閣, 97-111.
- 高地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E., 1989, IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. 試料外観 (A区2次面 SB4 柱穴埋土 柱No.2)
2. 試料外観 (A区2次面 SB4 柱穴埋土 柱No.3)
3. 試料外観 (A区2次面 SB4 柱穴埋土 柱No.4)
4. 試料外観 (A区2次面 SB4 柱穴埋土 柱No.6)
5. 試料外観 (A区2次面 SB4 柱穴埋土 柱No.7)
6. 抽出炭化物状況 (A区2次面 SB4 柱穴埋土 柱No.1上)
7. 抽出炭化物状況 (A区2次面 SB4 柱穴埋土 柱No.1下)
8. 抽出炭化物状況 (A区2次面 SB4 柱穴埋土 柱No.2上)

図版1 試料状況 (柱穴埋土炭化材)



9



10



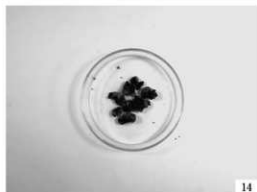
11



12



13



14

10cm
9-14

9. 抽出炭化物状況 (A区2次面 SB4 柱穴埋土 柱No 2下)

11. 抽出炭化物状況 (A区2次面 SB4 柱穴埋土 柱No 4)

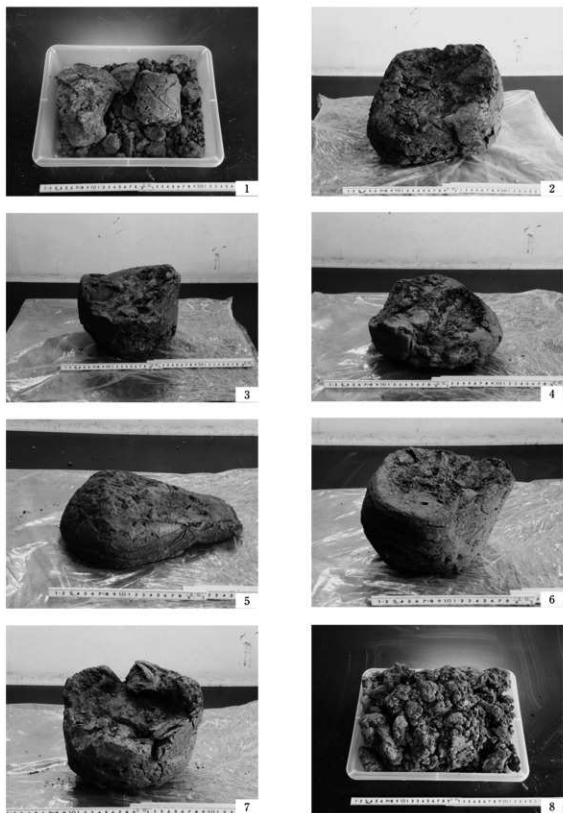
13. 抽出炭化物状況 (A区2次面 SB4 柱穴埋土 柱No 6)

10. 抽出炭化物状況 (A区2次面 SB4 柱穴埋土 柱No 3)

12. 抽出炭化物状況 (A区2次面 SB4 柱穴埋土 柱No 5)

14. 抽出炭化物状況 (A区2次面 SB4 柱穴埋土 柱No 7)

図版2 試料状況 (柱穴埋土炭化材)



1. 試料外観 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No.1上)
 2. 試料外観 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No.1下)
 3. 試料外観 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No.2)
 4. 試料外観 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No.3)
 5. 試料外観 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No.4)
 6. 試料外観 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No.5)
 7. 試料外観 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No.6)
 8. 試料外観 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No.7)

図版3 試料状況 (壺・甕形土器内土壌)



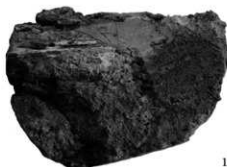
9



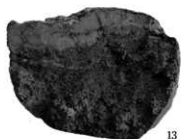
10



11



12



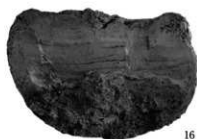
13



14



15



16

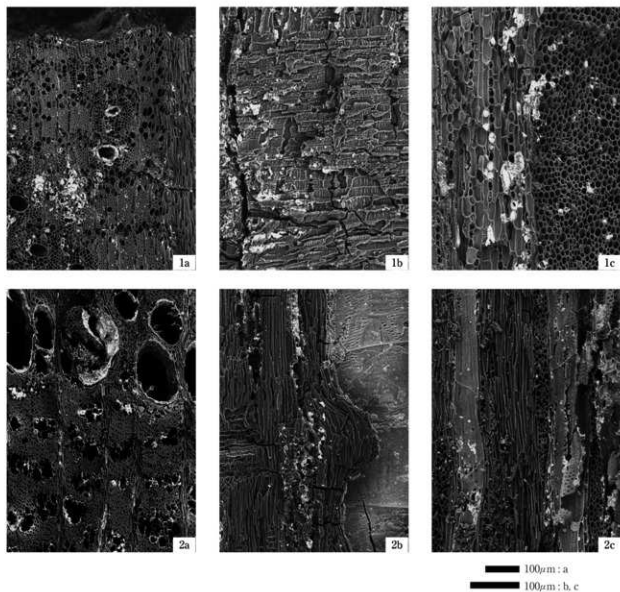


17

9. 試料外観 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No8)
 11. 試料外観 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No10)
 13. 試料半裁状況 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No2)
 15. 試料半裁状況 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No4)
 17. 試料半裁状況 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No6)

10. 試料外観 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No9)
 12. 試料半裁状況 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No1下)
 14. 試料半裁状況 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No3)
 16. 試料半裁状況 (A区2次面 SB4 床面直上 壺No5)

図版4 試料状況 (壺・莞形土器内土壌、半裁状況)



1. コナラ属コナラ亜属クスギ節 (A区2次面 SB4; 柱No1)

2. エノキ属 (A区2次面 SB4; 柱No4-①)

a: 木口, b: 柃目, c: 板目

図版5 炭化材



1. オニグルミ 核 (A区2次面SB4;壺No4)
2. イネ 胚乳 (A区2次面SB4;壺No1)
3. イネ 胚乳 (A区2次面SB4;壺No2)
4. イネ 胚乳 (A区2次面SB4;壺No10)
5. イネ 胚乳 (A区2次面SB4;壺No10)
6. イネ 穎 (基部) (A区2次面SB4;壺No3)
7. イネ 穎 (基部) (A区2次面SB4;壺No4)
8. イネ 穎 (基部) (A区2次面SB4;壺No10)
9. イネ 穎 (基部) (A区2次面SB4;壺No7)
10. イネ 穎 (基部) (A区2次面SB4;壺No7)
11. イネ科 穎・胚乳 (A区2次面SB4;壺No1)
12. サナエタテ近似種 果実 (A区2次面SB4;壺No2)
13. タデ属 果実 (A区2次面SB4;壺No2)
14. タデ属 果実 (A区2次面SB4;壺No2)
15. タデ属 果実 (A区2次面SB4;壺No2)
16. マメ科 (野生種) 種子 (A区2次面SB4;壺No6)
17. マメ科 (ダイズ類?) 種子 (A区2次面SB4;壺No6)
18. マメ科 (ダイズ類?) 種子 (A区2次面SB4;壺No6)
19. マメ科 (ダイズ類?) 種子 (A区2次面SB4;壺No10)
20. マメ科 (ダイズ類?) 種子 (餅・幼根) (A区2次面SB4;壺No3)
21. マメ科 (ダイズ類?) 種子 (幼根) (A区2次面SB4;壺No1)
22. マメ科 (ダイズ類?) 種子 (幼根) (A区2次面SB4;壺No7)

図版6 炭化種実

V まとめ

今回の調査では、弥生時代中期、奈良から平安時代の遺構・遺物を確認した。検出した遺構は住居跡20軒、そのほか土坑や溝である。調査面積は、建物建設部分のA区と立体駐車場部分のB区を合わせて600㎡弱である。調査は先に行った試掘調査の結果、包含層が重なって存在していたことから2次面を対象として調査を行った。

遺構面は1・2次面ともに西側が高く東側が低い斜面となっている。高低差は1次面で40cm、2次面では一番差が大きい調査区北西側で55cm。なお、1次面から検出面まで擾乱の影響を受けているB区2次面では約25cmである。また、2次面の下面については、工事工程との調整により2次面調査前に行われた矢板の設置作業で周囲が検出面より深く掘られたことから、遺構面下からは大型の礫を含んだ赤褐色の砂礫層となり遺構は存在しないことを確認した。

A区1次面は検出から全体に擾乱が広がっており、遺構の検出は調査区南側と西側が中心となった。ここでの住居は9軒、擾乱が重複または調査区外にかかる部分が多いことから遺構全体を検出できたものではなく、このうち1軒はカマド部分のみである。また擾乱部分にかかる位置で煙道とみられる部分の検出があることから、本来は擾乱のある北側にも遺構が広がっていたことが推測される。つづく2次面は、1次面でトレンチを設定して行った下層面の確認と試掘の結果から、調査区西側で1次面からおおよそ50cm下であることを確認して掘り下げを行った。2次面でも依然擾乱の影響を受けているものの、調査区のほぼ全体で遺構を確認することができた。ここでは、奈良・平安時代と弥生時代中期の遺構を同じ面で検出した。住居が奈良・平安時代6軒、弥生中期2軒と土坑、溝跡である。1次面から2次面への掘り下げでは、1次面よりも包含層からの土器の出土が少なかった。B区は、調査区全体に擾乱の影響を受けていたことにより1次面としての遺構は残存していなかった。2次面では奈良・平安時代の住居3軒と溝状遺構を検出した。

・弥生時代中期

住居2軒、土坑1基と遺構数は少ない。この中でA区2次面SB4は遺構のほぼ全体がわかる位の検出であり、床面では材の形が残る炭化材と土器を検出し、住居隅では土器10個体(壺9、甕1)を検出した。また柱を7本検出し、炭化材が残っているものがあつたことから、樹種同定をおこない、木材はエノキ属が使われているとの結果を得た。支柱であることから、堅穴住居の建築部材としてエノキ属が主体的に使われていたことが考えられる。柱痕には炭化した木材が残っていたことから、焼失住居である可能性が高く、住居は柱材がある状態で火を受けたことが推測され、床面の炭化材や土器の出土状況とともに、焼失時の住居の状態を示す例といえよう。

B区西側の溝(SD1)は、検出面からの深さ70cmの溝状の遺構である。調査区幅の6mほどと一部の検出であるが、やや西方向に曲がり、南北方向に伸びると想定される。底部の位置から幅(東西方向)は6.0~6.5mと推測される。底部は遺構面下の礫を含む砂層で、遺物の出上もほぼなかったが、形態と覆土の状況から人為的に掘り込まれたもので、2次面での検出であること、推定範囲では奈良・平安時代遺構(A-SB5)にかかる可能性があることから、弥生時代中期の遺構に付随するものと考えられる。なお、A区2次面SB4の土器堆積土壌の分析からは、住居廃棄後に河川の影響を受けていた可能性が示されている。

・奈良・平安時代

住居の検出は全部で18軒であるが、本来は調査区全体にこれよりも多く存在していた可能性が高い。さらに調査区全体で住居が重複しているが、上面(1次面)と下面(2次面)にわけられるほど床面で50cm前後の差を持って重複していることから、一定の期間に規模の大きな集落が展開していたことが考えられる。遺物では住居出

土の須恵器を中心とした土器のほか、円面硯（脚部分破片）がA区1次面SB4覆土中から出土した。遺構覆土中からの出土であり遺構に伴うものとは断定できないが、同じ位置からは双耳杯も出土している。

・1次面・2次面検出について

調査では1・2次面に区分して遺構を検出した。1次面は奈良・平安時代、2次面では弥生中期と奈良・平安時代であるが、奈良・平安時代の遺構の時期は、1次面が奈良末から平安前半で8世紀後半から9世紀前半、2次面は奈良後半から平安初頭で8世紀中葉から9世紀初頭であり、大幅な時期差はみられなかった。よって、2面に分けて調査を行った要因と住居の位置についてを、住居の検出結果から以下の様に示す。

1次面と2次面ともに検出面の上面は攪乱の影響や検出面自体に傾斜があることから、住居の床面の高さを比較対象とした（図37）。調査区西側から東側に向かって低くなるという検出面と同じ傾斜があることがわかる。1次面と2次面での床面の高さを比べると、調査区東側で重複している1次面SB2と2次面SB3で50cm、西側1次面SB6と2次面SB4で57cmの差がある。この差は重複してはいないが、位置に近い住居で見た場合でもほぼ全体的にみられる。唯一重複した状態で検出したA区1次面SB4とSB9では49cmの差があるが、SB4とSB9（2次面検出に相当する）の場合、間にもう1軒重複している可能性のある炭化面を検出したため一緒に掘り下げたが、この他は1次面と2次面での差が50cm前後と深かったことにより、結果としてこの差を面の違いとして掘り下げることとなったものである。

1次・2次面の区分けについては、間に包含層が入るような時期差があるものではなく、上面の遺構と下面の遺構とがはっきりとみられるほどの深さのあった重複であることから、2次面の包含層は存在せず、1次面検出時よりも土器の出土が少なかったのはこのことによる。A区2次面の遺構では、検出面からの掘り込みが深いものと浅いものとの差は、上面に遺構が重複していたかによる可能性も考慮される。また、住居は調査区内では北西方向からの地形に沿った傾斜のある場所に造られていることが確認できる。

弥生時代中期と奈良・平安時代の集落が同じ面にあり、今回の調査では、弥生後期から古墳時代の遺構は確認されなかったが、古墳時代の集落は調査区周辺で確認されていることから、この間時期によって集落が移動していたことが考えられる。弥生時代中期の住居の廃棄後に河川等の影響を受けていたことや地形に沿った斜面にあることなど、環境の変化があった場所であることなどもその要因の一つであるといえよう。奈良・平安時代については、住居数が多く集落の中心であることが考えられるほか、周辺遺跡での出土遺物から、以前より官衙などの存在が考えられている場所である中で、今回の調査でも円面硯の出土があったことから、規模の大きな集落が展開し、さらには地方官衙のような存在が位置する可能性が高い場所である。

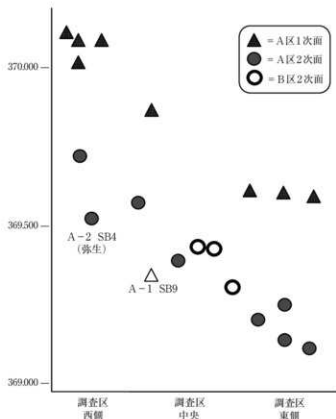


図37 住居床面標高・位置図





82



84



85

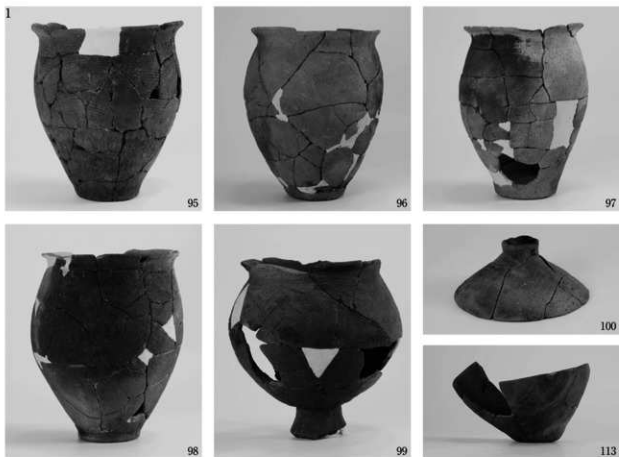


83

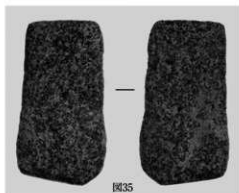


86





番号 = 実測図番号に対応



報告書抄録

ふりがな	ながのいせきぐん あがたまちいせき
書名	長野遺跡群 県町遺跡
副書名	(仮称) サーバス県町新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第147集
編著者名	遠藤忠実子 バリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL: 026-284-0004 FAX: 026-284-0106
発行年月日	2017(平成29)年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積	調査起因
		市町村	遺跡番号					
県町遺跡	長野県長野市 大字南長野 字聖徳527番 4外	20201	C-005	36° 39' 12"	138° 11' 3"	2016.1.12 ～ 2016.2.19 2016.4.25 ～ 2015.5.17	596㎡	マンション 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
県町遺跡	集落	弥生時代 中期		竪穴住居 2 土坑 2 大型溝 1		弥生土器 扁平片刃石斧	住居主柱材 土器集中	
		奈良・平安時代		竪穴住居 18 溝 2		土師器・須恵器 円面硯		
要約	<p>弥生時代中期、奈良～平安時代の集落。2次面にわけて調査を行なった。調査区は全体的に前建物等の擾乱などの影響を受けていたが、奈良・平安時代で18軒、弥生時代は2軒を確認した。平安時代の住居覆土中からは円面硯(破片)・双耳環が出土し、弥生時代中期の住居跡では、床面に炭化材や土器があるほか、隅に土器が10個体まとめて置かれていた。</p> <p>奈良・平安時代は、住居が多く重複するなど密につくられた集落であり、このほか周辺には官衙などが存在していたことが考えられる場所である。</p>							

長野市の埋蔵文化財 第147集

長野遺跡群

県町遺跡

平成29年3月31日 発行

発行 長野市埋蔵文化財センター

編集 長野市教育委員会

印刷 大日本法令印刷株式会社